戸津六字ヶ丘古窯跡

発掘調査概要報告書

1987.3

小松市教育委員会

凡　　例

1. 本書は、昭和60・61年度において実施した、農業構造改善事業にかかる開発行為に伴う戸津六字ケ丘古窯跡群の発掘調査概要報告である。
2. 調査は、国宝・重要文化財等保存整備事業費補助金及び石川県の埋蔵文化財保存事業補助金の交付を受けて、昭和60・61年度に小松市教育委員会が主体となり実施した。

   昭和60・61年度の調査は以下のとおりである。

   昭和60年度　戸津町地内（A地区）調査　　戸津町ヨ36番地

   昭和61年度　林　町地内（B地区）調査　　林町ウ18番地
3. 調査は、小村　茂指導のもと宮下幸夫が担当し、樫田　誠・望月精司の協力を得た。また、昭和61年度においては、宮田佐和子・江野直子が補助員として加わった。

   出土品整理は、小村指導のもと宮下・樫田・望月のほか、石田和彦・宮田・江野が主にあたり、小松市埋蔵文化財出土品整理室の松原誠一・荒木和浩・玉尾真佐子・打田外喜代の協力を得た。なお、出土土器の実測は、石田・宮田・江野があたり、トレースは宮田が行った。
4. 調査にあたっては、地主上田喜義・加藤六三郎の両氏と福本商店の協力を得た。記して謝意を表したい。
5. 調査及び概要報告書の作成にあたっては、石川県教育委員会事務局文化課及び石川県立埋蔵文化財センターの指導を得るとともに、以下の方々の多大な御協力と御指導を得た。記して謝意を表したい。

   楢崎彰一　大川　清　斎藤孝正　田中照久　福島正実　垣内光次郎　近間　強

   名古屋大学考古学研究室　　（順不同　敬称略）
6. 本書の編集は、小村指導のもと、宮下・樫田・望月があたり、執筆は宮下が行った。

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と周辺の遺跡……　1

Ⅱ　調査の経緯と経過……　3

Ⅲ　遺構と遺物……　4

　1　遺　構……　4

　2　遺　物……　13

Ⅳ　ま と め……　37

Ⅰ　遺跡の位置と周辺の遺跡

いわゆる南加賀地方は、西に日本海、東に白山前山地帯を形成する能美・江沼丘陵にはさまれた狭延な地域で、南西で福井県に接した江沼盆地と、これに連続して東北方に広がる能美平野からなっている。

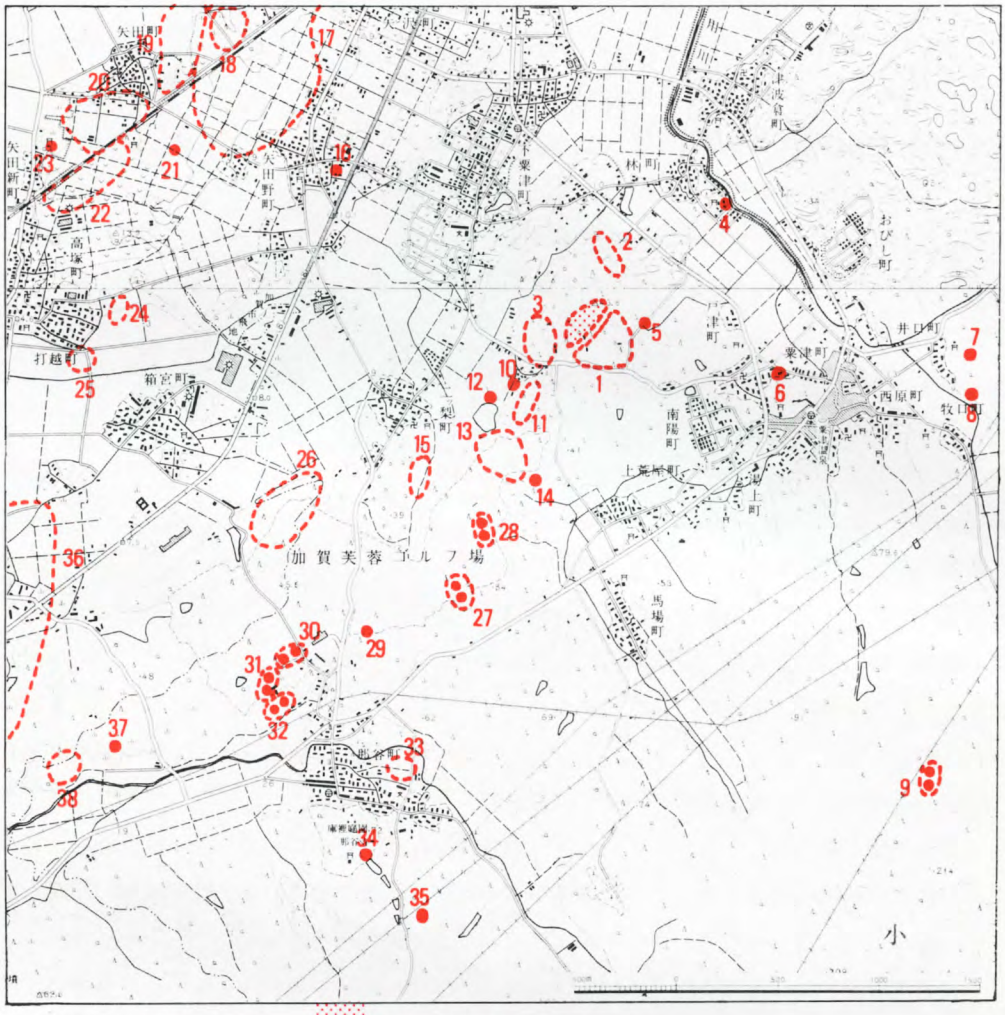
この江沼盆地と能美平野の中間位置に加賀三湖（柴山潟・今江潟・木場潟で、現在、柴山潟の一部と木場潟が残っている。）と、これによって形成された潟埋積平野が広がり、東南を白山前山地帯と境を接し、いたるところで小谷を形成している。粟津温泉は、矢田野町付近より東南方に伸びる奥深い谷の中程にあり、調査対象となった戸津六字ケ丘古窯跡群は、粟津温泉より西方に入りこむ一支谷の中程、戸津町より二ッ梨町に至る県道に開口する小支谷の西北斜面と、尾根の反対斜面に位置している。前者は、石川県小松市戸津町ヨの部であり、後者は、小松市林町ウの部である。

白山前山地帯に平行して江沼盆地と能美平野を貫いて伸びる国道八号線と、粟津松山地溝帯に沿って粟津町より那谷町を通り山代に至る県道津波倉・山代線にはさまれて、小松市林町より加賀市松山町まで、幅約１㎞、長さ約５㎞で標高45ｍ前後の低い丘陵が連っている。この丘陵には、古墳時代から平安時代までの須恵器窯跡を始めとし、埴輪窯跡や平安時代末より鎌倉時代までの瓷器系窯跡が存在し、これらを総称して南加賀古窯跡群と呼称している。

戸津六字ケ丘古窯跡群は、広くは戸津古窯跡群の中に含まれるものである。戸津町周辺は、土器が多く出土することが幕末に書かれた『江沼誌』にも載っていて、相当古くより知られていたことや、最近の調査で、古墳時代から奈良・平安時代の須恵器窯跡が密集し、また、土師器窯跡が集中分布することが判明し、重要な地域として確認された。

更に、近年の分布調査で、粟津松山地溝帯より反対側の前山地帯に小谷がいくつか形成されているが、この小谷に面した斜面で平安時代の須恵器窯跡や、鎌倉時代末から室町時代にかけての瓷器系窯跡の発見があいつぎ、南加賀古窯跡群の立地等について再検討しなければならない。

周辺の地形



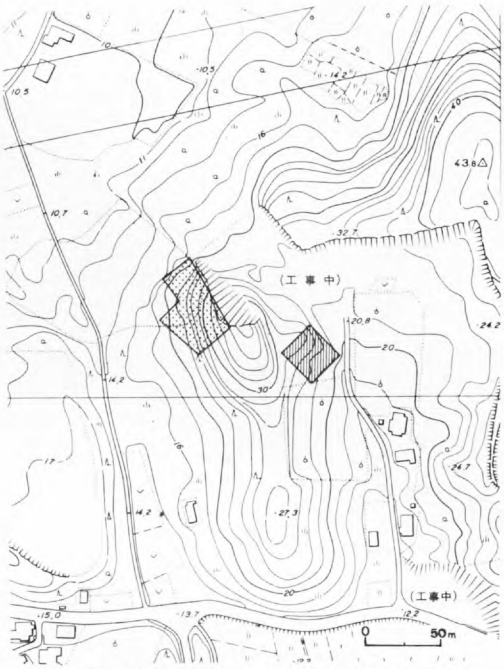
第１図　周辺の遺跡　　**戸津六字ケ丘古窯跡群**

１戸津古窯跡群　２林古窯跡群　３二ッ梨一貫山古窯跡群　４林八幡神社経塚　５戸津５号窯跡　６戸津本蓮寺跡　７井口神社製鉄跡　８牧口中世墓跡　９西荒屋カマンダニ古窯跡群　10豆岡山１号窯跡　11豆岡山向古窯跡群　12殿様池古窯跡群　13二ッ梨古窯跡群　14上荒屋サンマイ谷古窯跡　15二ッ梨東山古窯跡群　16中村古墳　17矢田野遺跡　18借屋古墳群　19矢田遺跡　20矢田新遺跡　21狐森塚古墳　22無名古墳群　23矢田新丸山古墳　24打越弥生遺跡　25打越縄文遺跡　26箱宮古墳群　27奥谷古窯跡群　28上荒屋古窯跡　29那谷１号窯跡　30小天王谷古窯跡群　31大天王谷古窯跡群　32カミヤ古窯跡群　33那谷遺跡　34那谷堤遺跡　35那谷タタラ跡　36分校古墳群　37那谷桃の木山１号窯跡　38那谷金比羅山古窯跡群・金比羅山古墳

Ⅱ　調査の経緯と経過

昭和50年に戸津町在住の上田喜義氏は、氏の耕作するブドウ園の機械化をはかる目的で、急傾斜となっている段畑を平地化する事業を計画し、教育委員会と協議を行った。市教委では試掘調査及び以前に確認されていた窯跡の発掘調査を実施した（戸津９号窯跡）。

その後、平地化事業は試掘調査で窯跡が確認されなかった部分で進められた。その間、昭和56年度より59年度まで５次にわたって、戸津９号窯跡の向い側の丘陵で窯跡の発掘調査が行われ、須恵器窯跡25基、土師器窯跡18基、地下式平窯１基、瓷器窯跡１基、炭窯跡と思われる遺構１基の計46基の窯跡が検出され、また、昭和57年には今回調査を行った六字ケ丘で１基の須恵器窯跡の調査も行われた。



第２図　発掘調査区　昭和60年度調査区　昭和61年度調査区

昭和60年にはいり、工事が昭和50年に調査した戸津９号窯跡の部分にかかり、その灰原が未調査で残存していたため昭和60年度事業として、また、丘陵の西斜面の地主加藤六三郎氏も同事業を実施する旨を連絡されたので昭和61年度事業として、国及び県の補助金を得て小松市が主体となって発掘調査を実施した。

その結果、昭和60年度調査区（Ａ地区）では、戸津９号窯跡の東西に２基の須恵器窯跡が検出された。しかし、昭和50年の調査では確認できなかったため上半が工事で削平されていた。昭和61年度調査区（Ｂ地区）では、３基の須恵器窯跡が検出された。

昭和60年度調査風景（11号窯跡）

昭和61年度調査風景（４号窯跡灰原）

Ⅲ　遺構と遺物

1. 遺　構

(1)　A地区の調査（第3図、第Ⅰ図版）

A地区では、2基の須恵器窯跡が検出され、戸津9号窯跡と並行して築かれていたことが確認された（戸津10・11号窯跡）。昭和25年に県内で最初に須恵器窯跡が発掘調査された戸津4号窯跡と合せて、この地区で4基の須恵器窯跡が存在し、いずれも平安時代中期の窯跡であった。

以下、昭和60年度に行ったA地区での戸津10・11号の2基の窯跡について簡単に記述してゆきたい。

戸津10号窯跡（第5図、第Ⅰ図版）

戸津9号窯跡の右（東）に検出された窯で、焼成部中央より窯尻にかけては削平されていた。現存長5.5 m、焼成部最大幅2.1 m、焚口幅1.2 mをはかる。

床面は、焚口より約20度の傾斜で下降し始めるが、徐々に水平になり、焚口より2.2 mの地点より変換し、約25度で昇っている。

舟底ピット

本窯は1回改造されていて、1次床・2次床は焚口より2.5 m地点までは同じ窯床であり、この地点より1次床は2次床の下に検出された。最も深いところで約20cmをはかり、現存長もやや長く5.8 mであった。床の勾配は、やや凹凸があるが平均で25度であった。壁は2次床のやや外に検出された。

燃焼部と焼成部の境付近で天井が遺存していて、この部位で高さは1.1 mであった。また、燃焼部から焼成部にかけて舟底ピットが検出され、最深部は約70cmをはかる。

前庭部には、1.9 × 1.4 mの略楕円形の浅い土坑が検出された。

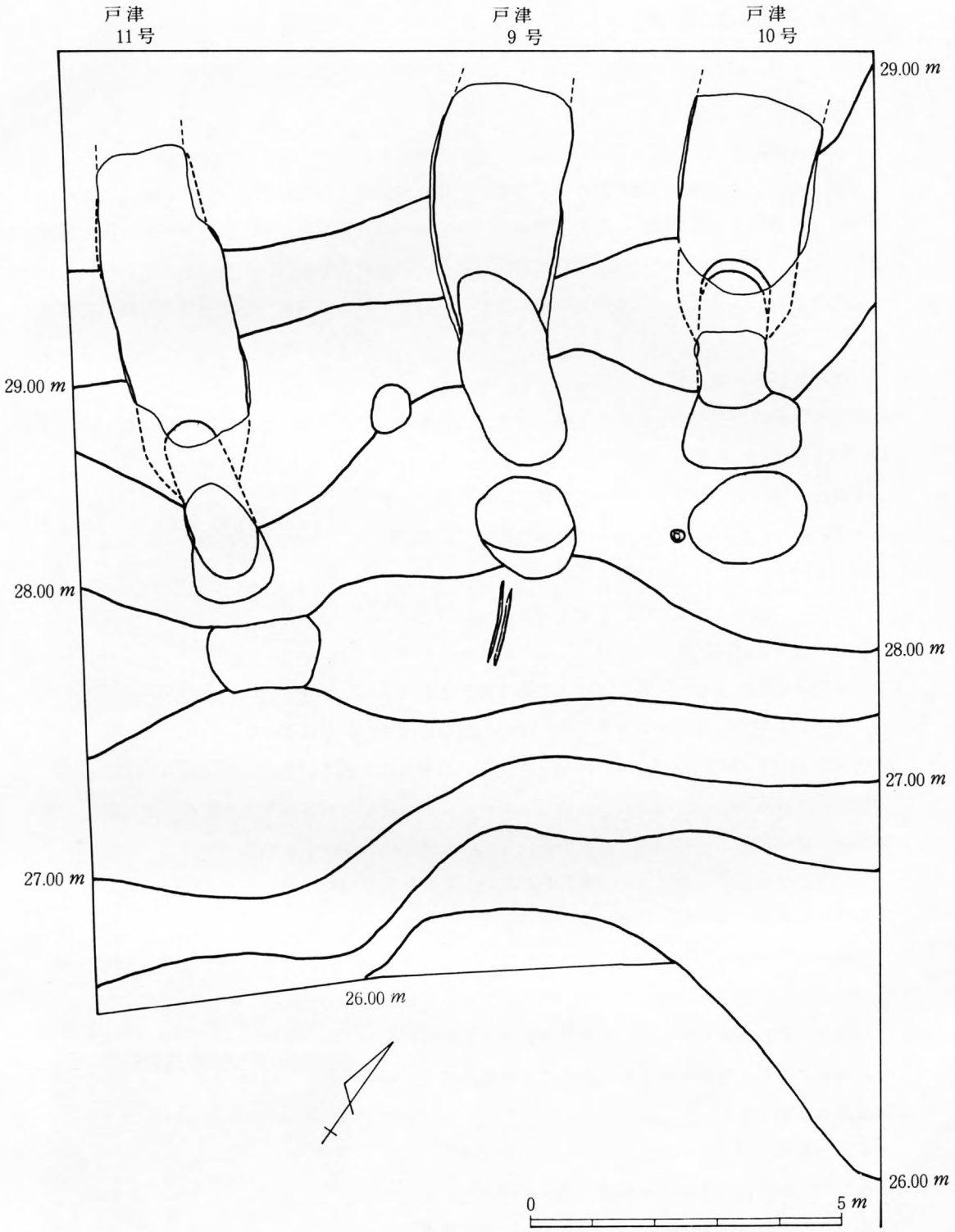
戸津11号窯跡（第6図、第Ⅰ図版）

戸津9号窯跡の左（西）に検出された窯で、やはり窯尻部から焼成部にかけて削平されていた。現存長7.3 m、焼成部最大幅2.1 m、焚口幅1.2 mをはかる。

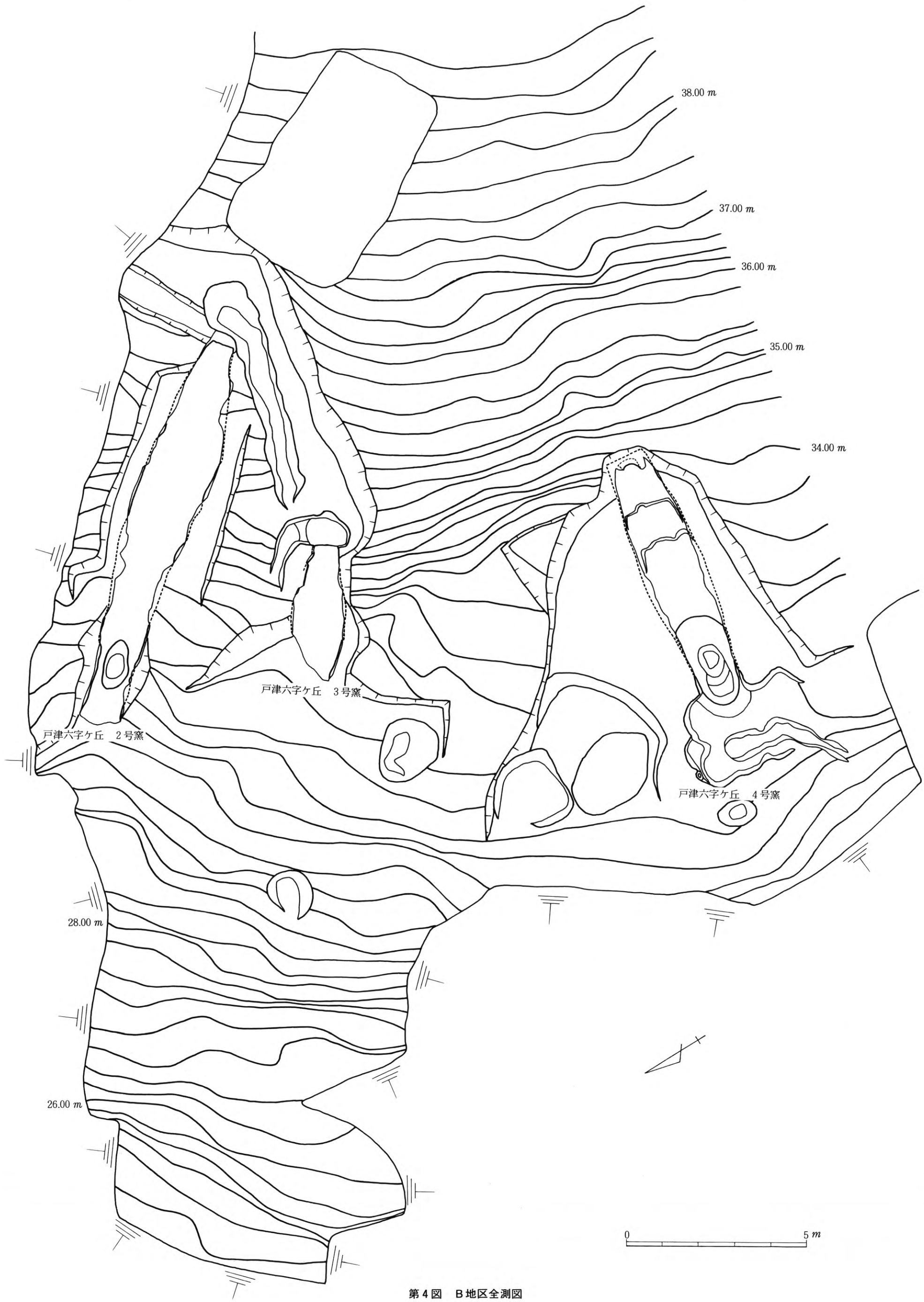
床面は、焚口よりやや下降し始めるが、徐々に水平になり、焚口より2.4 mの地点より変換し、上昇に転ずる。傾斜は最大で約35度をはかる。

土器出土状況

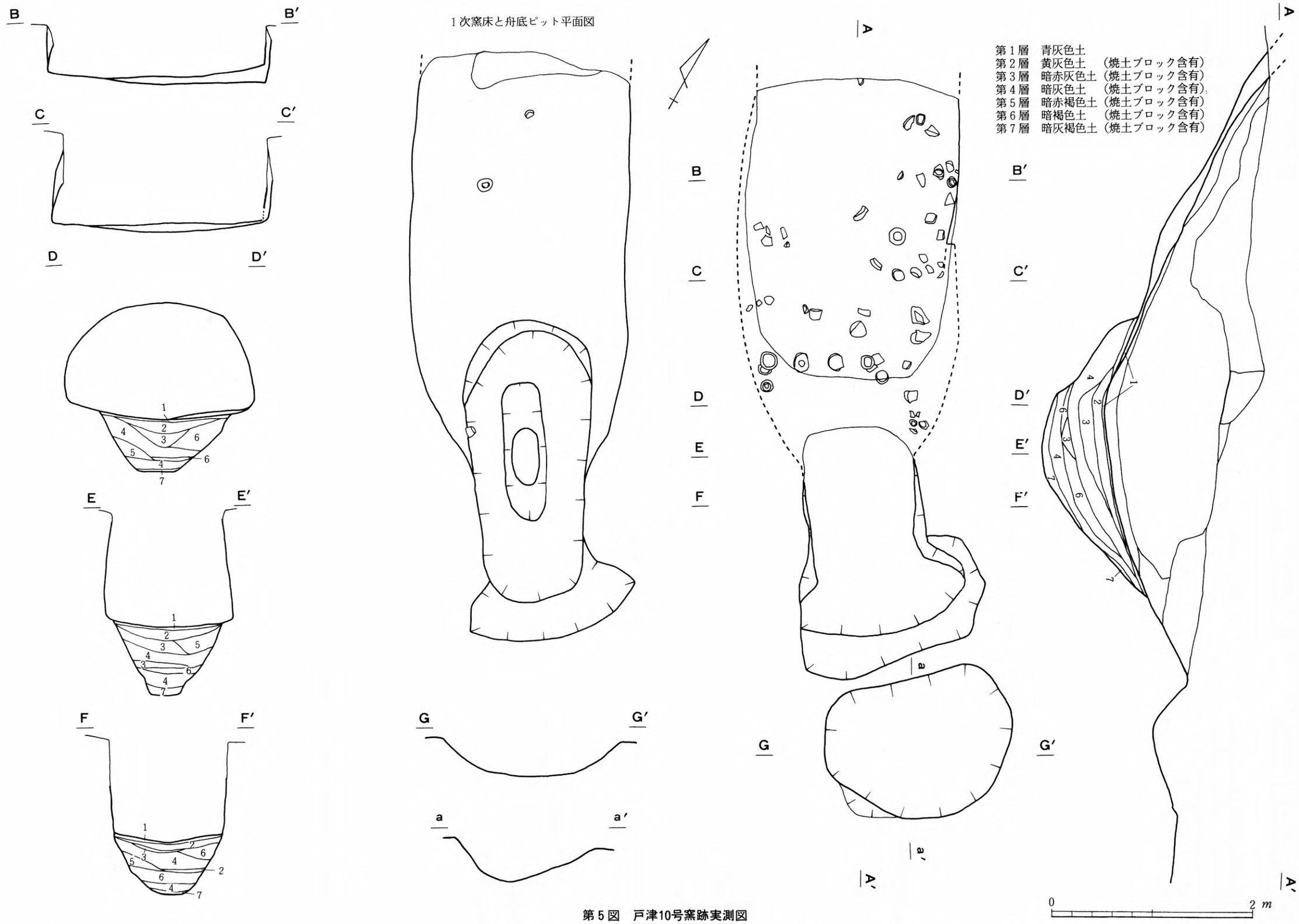
本窯も1回の改造が認められた。1次床は焚口部で20～25cm、燃焼部で最大35cm下に検出された。焼成部では20cm下であった。現存長もやや長く7.5 mであり、幅は焼成部ではほとんど変らず、焚口から燃焼部ではややせばまっている。


戸津
11号
戸津
9号
戸津
10号
29.00 m
29.00 m
28.00 m
28.00 m
27.00 m
27.00 m
26.00 m
26.00 m
0
5 m

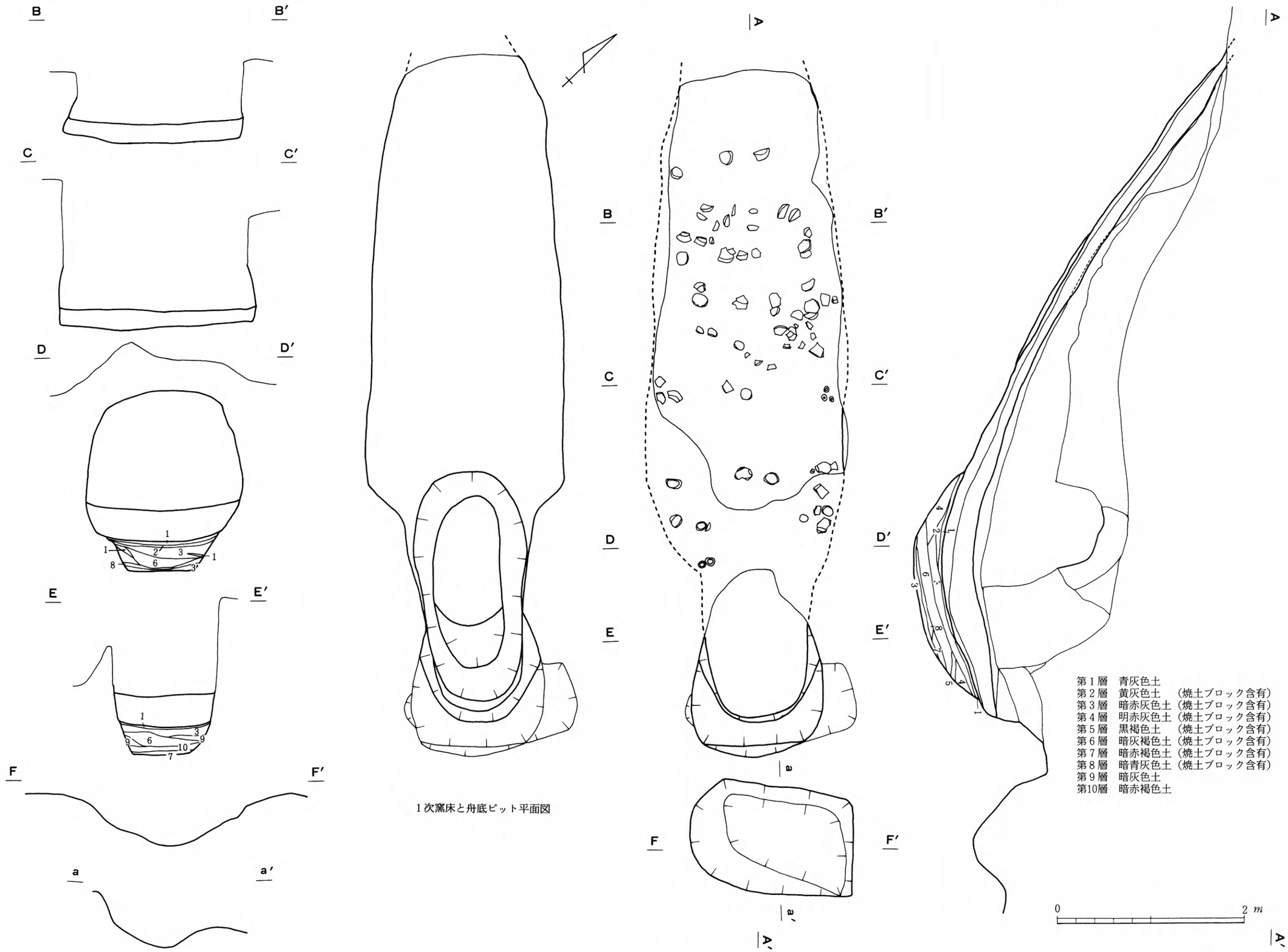
第3図　A地区全測図


38.00 m
37.00 m
36.00 m
35.00 m
34.00 m
戸津六字ケ丘　3号窯
戸津六字ケ丘　2号窯
戸津六字ケ丘　4号窯
28.00 m
26.00 m
0
5 m

第4図　B地区全測図



第5図　戸津10号窯跡実測図



第6図　戸津11号窯跡実測図

本窯も燃焼部の天井が遺存していて、燃焼部中央で最高130㎝をはかり、焚口に向かってせばまっていて約90㎝であった。また、焚口から燃焼部にかけて舟底ピットが検出され、深さは約30㎝であった。

前庭部には、1.7×1.2ｍの略方形の浅い土坑が検出された。

舟底ピット

(2) Ｂ地区の調査（第４図）

Ｂ地区では、３基の須恵器窯跡が検出された（戸津六字ケ丘２～４号窯跡）。昭和57年度の調査の時の１基を合わせて、この地区では現在までに４基の窯跡の調査が行われた。今回の３基の窯跡はいずれも飛鳥時代の窯跡であった。

以下、昭和61年度に行ったＢ地区での戸津六字ケ丘２～４号窯跡の３基の窯跡について簡単に記述してゆきたい。

戸津六字ケ丘２号窯跡（第７図、第Ⅱ図版）

全長12.8ｍ、幅は煙道との境で0.7ｍ、焼成部最大で1.8ｍ、焚口では1.1ｍをはかる。床面は、焚口より燃焼部にかけて約10度で下降し、後、水平になり、焼成部との変換点より約25～30度で上昇し、最大傾斜角は35度である。焼成部奥で約20度に減じ、煙道との境で水平になっていて、煙道ではやや下降して底に達し、水平で奥壁に至る。

煙道部は、主軸上で上端1.4ｍ、下端0.6ｍのロート状になっていて、ここより右に約５ｍの長さで溝がうがたれていた。溝底は、煙道部よりゆるい傾斜で下っている。また、壁は、煙道部分及び溝の一部が焼けていた。

本窯跡は１回の改造が認められた。１次床は、窯尻より2.6ｍの地点より9.4ｍの地点まで認められ、他は２次床と同じであった。深いところで20㎝下に検出され、幅はややせばまっていた。

主軸方位は、N－41.5°－Wであった。

溝全景

戸津六字ケ丘３号窯跡（第８図、第Ⅱ図版）

燃焼部から焚口部が削平されていた窯で、現存長4.6ｍ、最大幅1.55ｍをはかる。床面の傾斜は、削平されている所でほぼ水平となっているので、長さはこれ以上あまりのびないと思われる。

床面の傾斜は、水平部が終わると約30度で昇り、中央部より25度になり、徐々にゆるくなって煙道との境で10度であった。

煙道部は、80×120㎝で隅丸方形状の広さで築かれていて、左へ溝が設けられていた。

主軸方位は、N－55°－Wであった。

戸津六字ケ丘4号窯跡（第9図、第Ⅱ図版）

全長7.9ｍ、幅は奥壁で1.1ｍ、焼成部最大幅1.8ｍ、焚口で1.2ｍをはかる。床面は、焚口では水平で、燃焼部にかけてやや下降し、焼成部変換点より約15度で昇っていて、窯尻では約10度となっている。

煙道は、調査過程では残存していたが、窯体完掘後、写真撮影終了ののちの雨天のため崩壊した。壊れる前の計測値では、床面より高さ90㎝より2ｍまで残っていた。上部で径約40㎝、下部では径約45㎝であり、円形のプランを有していた。

奥壁より1.4ｍと2.5ｍの地点で、床面に段が設けられていた。高さは前者が15㎝、後者が10㎝であった。また、3.6ｍの地点に2カ所、20㎝前後のくぼみがみられ、このあたりの床面はあまり遺存度がよくなかったので、あるいは、段が存在したのかも知れない。

焚口から燃焼部にかけては舟底ピットが認められた。

前庭部には、土坑状遺構とそれより排水溝が右へうがたれていた。

主軸方位は、N－81°－Wであった。

1号土坑

4号窯跡の左（北）に位置していて、2.6×1.8ｍの楕円形を呈している。深さは約40㎝をはかる。

2号土坑

1号土坑の横（北）に位置していて、斜面にあり、谷側の壁が検出できなかったためコの字状を呈している。一辺約2.0ｍの大きさである。

いずれも、埋土には黒灰色土が認められた。

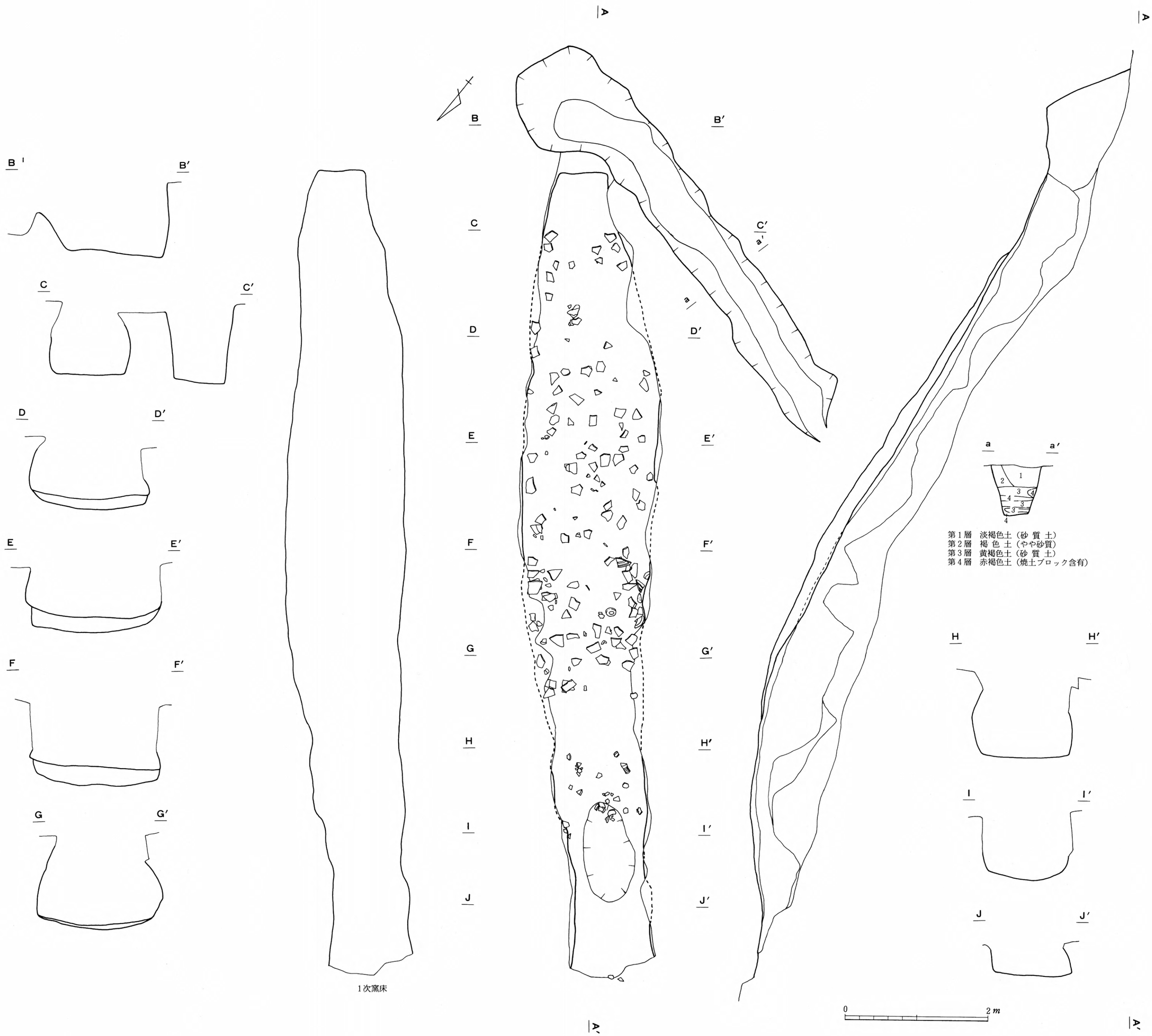
2. 遺　物

A地区・B地区で出土した遺物は、須恵器が主であり、若干の陶硯が認められた。以下に各窯跡より出土した遺物を主に、若干の灰原遺物も記述するが、十分な検討を行ったわけではないことを記しておく。

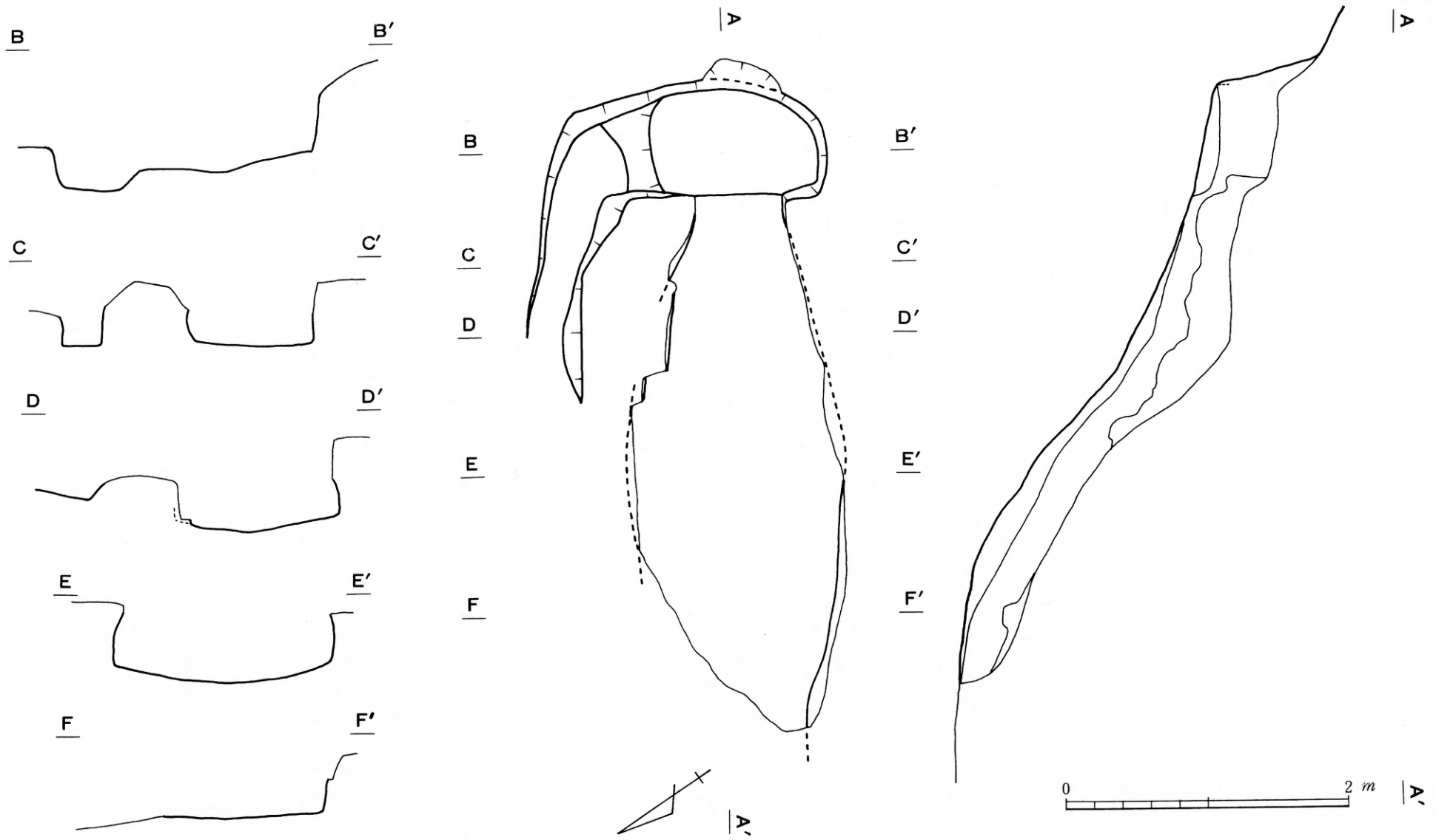
戸津10号窯跡出土遺物（第Ⅲ図版1～6）

窯体内にはあまり製品は残っていなかったが、器種は坏、蓋、皿、有台皿、壷、甕、双耳瓶、鉢等である。

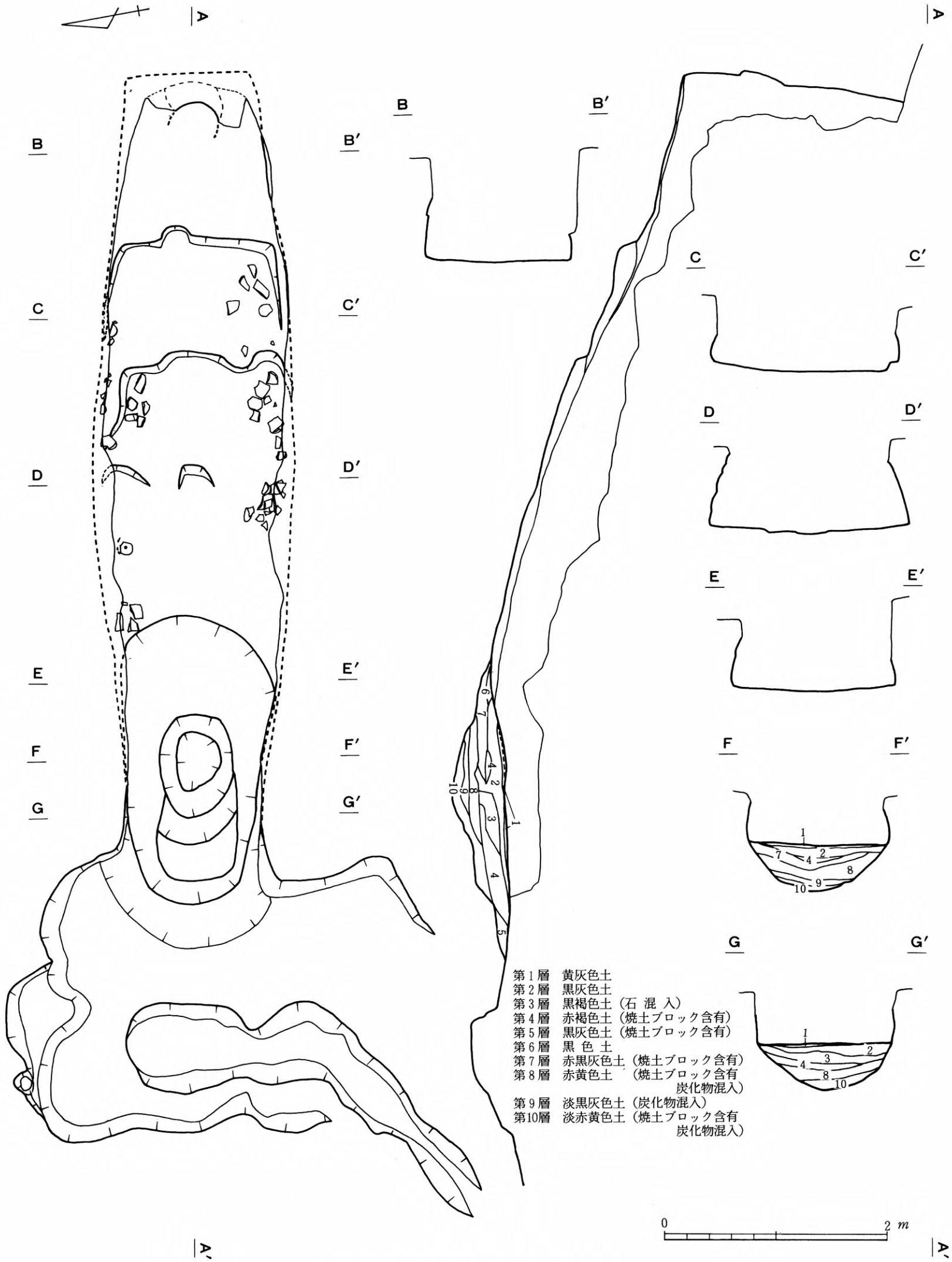
蓋は無鈕であり、器高のやや高いもの（第10図－3、4）と扁平な器形のもの（同図－1、2）があるが、いずれも天井をヘラ切り後ナデ調整を行っている。



第7図　戸津六字ケ丘2号窯跡実測図



第8図　戸津六字ケ丘3号窯跡実測図



第9図　戸津六字ケ丘4号窯跡実測図

坏は、底部が回転ヘラ切りによっていて、ナデ調整を施す。薄手（第10図－10、13）とやや厚手（同図－５～９、11、12、14）が認められる。

皿は、器高の低い扁平な器形を呈す製品で、底部は回転ヘラ切り後ナデ調整を施すもの（第10図－15・16）である。

有台皿は、底部に回転糸切り痕を有するもので、高台は台の高いしっかりした造りのもの（第10図－17）と、台がやや低いつくりのものが認められる。

甕（第10図－18）はやや小ぶりであり、口径23㎝をはかる。外面は平行タタキで、内面には同心円タタキを有し、ていねいなスリケシを行っている。

双耳瓶（第11図－３）は、耳穴が１つの小ぶりの製品であり、底部には焼台として使用した有台の坏か皿片が付着している。

長胴甕（第11図－３）は、胴下半に６条１単位の平行タタキを施してあり、内面は同心円タタキがやはり胴下半に認められ、それをスリケシている。

壷（第11図－２）は、口径16.4㎝をはかり、やや平行タタキの痕跡の残るものである。

以上の２点は、前庭部の出土である。

その他、１次床では、有台坏や埦、鉢が出土しているが、量は多くない。

戸津11号窯跡出土遺物（第Ⅳ図版１～10、11の左、12、第Ⅴ図版１・２）

本窯の床面にはかなりの数の製品が残っていた。また、燃焼部、焚口部の埋土中には蓋などの製品が重って出土した。これらは、窯が廃絶後、焼成部床面にとり残されていたものが、窯が埋没してゆく過程で、床面の斜面がきついため、下に落ちたものと考えられた。器種は、坏、蓋、皿、有台坏、有台皿、埦、有台埦、壷、甕、鉢、双耳瓶、有台壷、有台盤、陶錘、台付長頸瓶などが認められる。

蓋はいずれも無鈕で、天井部を回転ヘラ切り後ナデ調整を行っている。径13～15㎝の大きさのもの（第13図－１～５）と径19㎝内外の大ぶりのもの（同図－６～９）が認められた。

坏（第13図－14、15、17～21）は、回転ヘラ切りの後ナデ調整を行っている。口径に比べて器高の高いものが認められる（同図－18～21）。

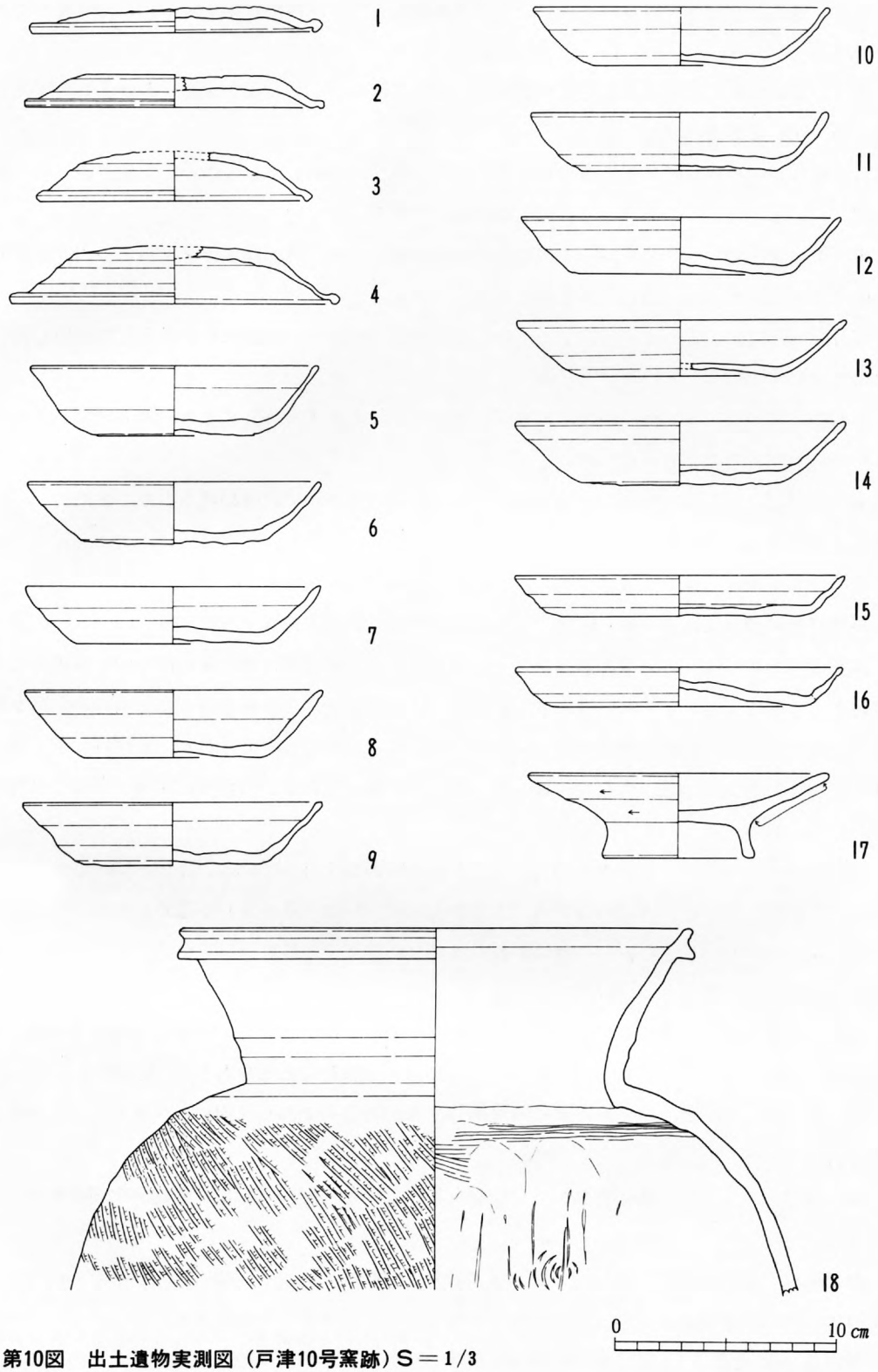
有台坏（第13図－10～13）は、いずれも回転ヘラ切りの後、入念なナデ調整を行っている。ただ１点（同図－13）は、立ち上がりが急で、内外のナデ調整も入念なもので、疑問のものである。

埦（第13図－16）は、底部静止糸切りであり、外面の立ち上がりは回転ヘラケズリの後ナデ調整を行っている。

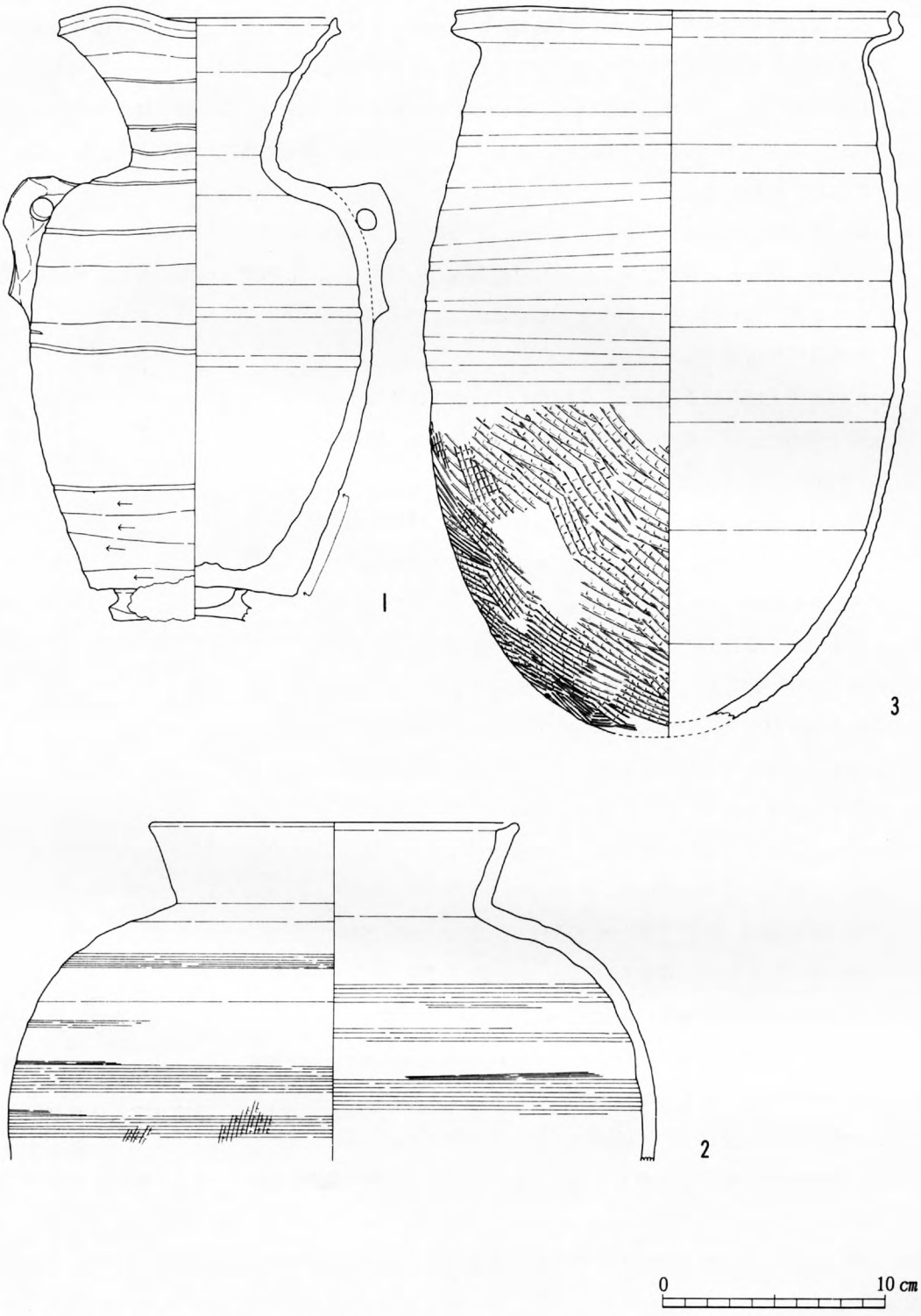
皿（第14図－１～３）は、器高の低い扁平な形を呈する。回転ヘラ切りの後ナデ調整を行っている。

有台皿は、回転糸切り（第14図－７、９、10）と回転ヘラ切り（同図－８）がある。高台のつくりは、台の比較的高いもの（１㎝内外）が多いが、一部薄手のものもある。

手付瓶（第14図－11）は、徳利形小瓶に把手がついたもので、灰釉陶器を模したものであろう



第10図　出土遺物実測図（戸津10号窯跡）S＝1/3



第11図　出土遺物実測図（戸津10号窯跡）S＝1/3

が、胎土は1㎜位の砂粒を多く含み粗い。

瓶（第14図－12）も同じような粗い胎土であり、おそらく灰原で出土している浄瓶（第16図－3）のような形の口が付くものと考えられる（第Ⅳ図版11）。

耳皿（第14図－13）は、底部はていねいなナデ調整を施してあり、切り離しは不明である。耳の部分に4本の浅い線が刻まれていて、おそらく曲げて耳を造るときにヒビなどがはいらないようにしたと思われる。

鉢（第14図－14）は、小ぶりであるが、その他大ぶりのものも出土している。

その他、双耳瓶（第15図－1）、台付長頸瓶（同図－2）、長胴甕（同図－3）、壷（第16図－1）、甕（第23図－1）が出土している。

A地区灰原遺物

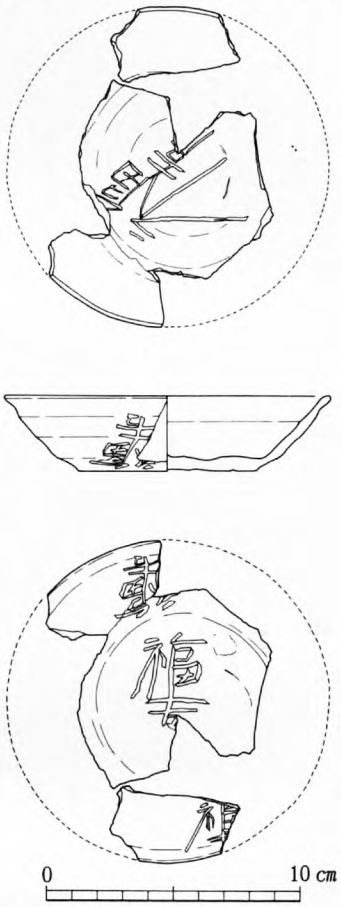
記銘文字入坏（第Ⅲ図版7、第12図）は、A地区灰原より破片で出土、復元径12.8㎝、器高3.0㎝をはかる。底部は、回転ヘラ切りの後ナデ調整を行っている。

文字は、内底、外底及び体部に刻まれている。体部には2カ所認められるが、欠けているので4カ所に書かれていた可能性もある。

文字は、ヘラ状具によって「福吉」と刻まれている。内底はやや細い線になっているので、外面よりとがっているもので刻まれたものである。体部の文字は、底から口縁部に向かって書かれていて、逆さになっている。福の口と田の左タテ画をつなぎ、そのままのびて吉の土のタテと口の左画につづいている。内底では、その線がつながって見えるが、一画ずつ書かれている。

文字の意味は、吉祥文字と考えられる。また、10号窯跡で焼かれていたものと考える。

注口付瓶（第Ⅴ図版3、第16図－2）は、高台の付かないもので、注口の部分の内側にヘラ状具による線刻がみられる。線の右はじを上へはね上げているものである。

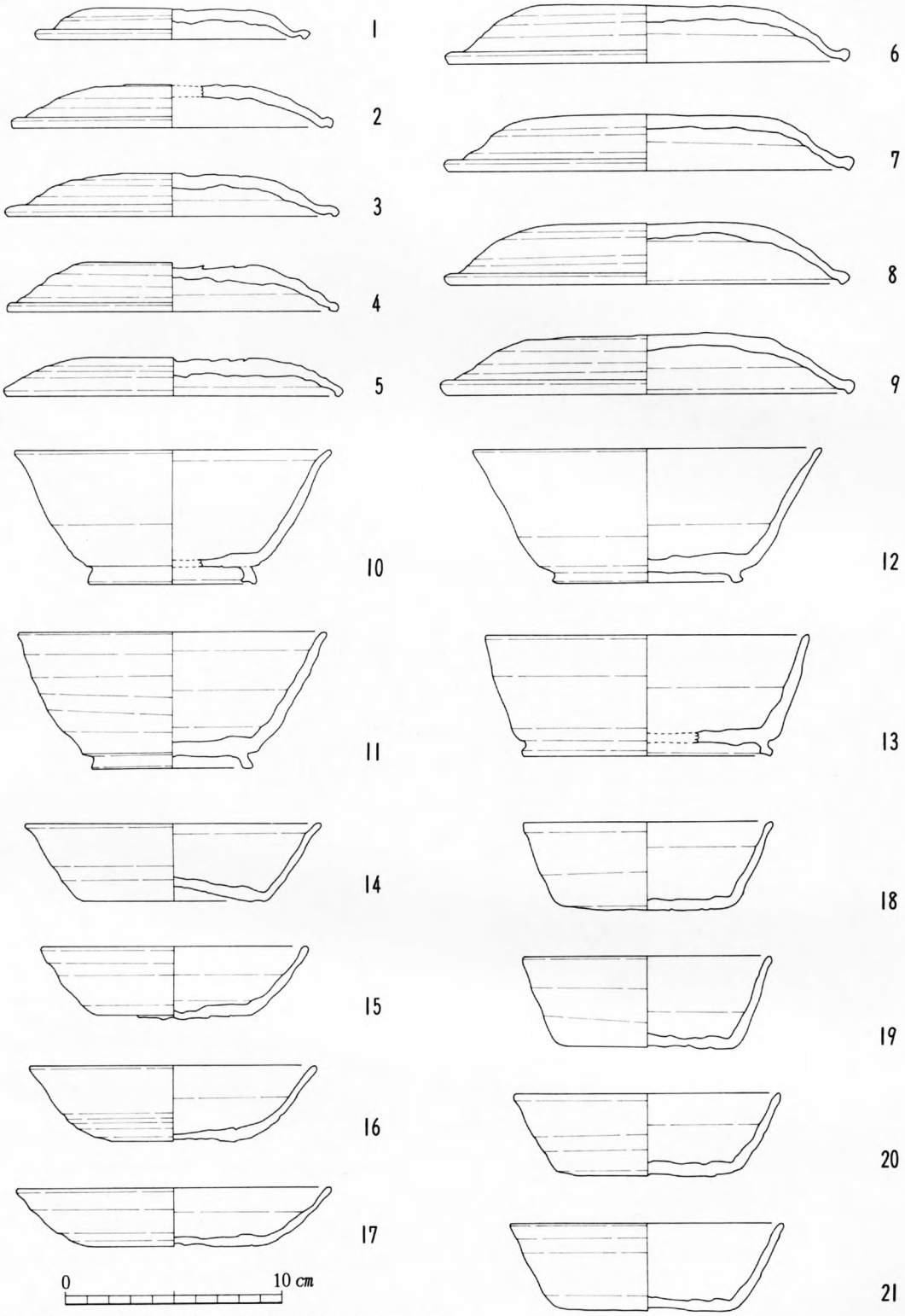


第12図　記銘文字入坏実測図

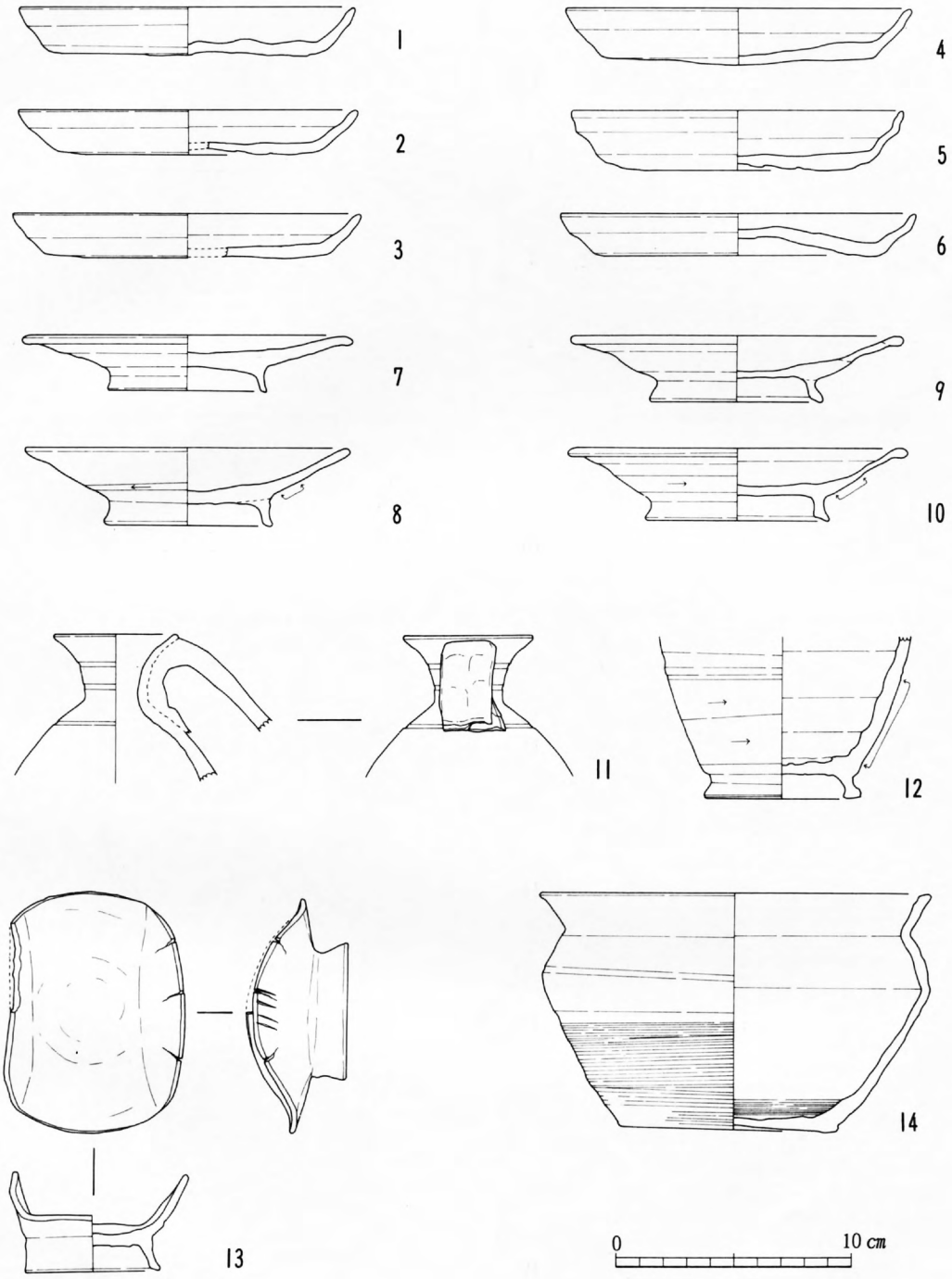
S＝1/3

浄瓶（第Ⅳ図版11の右、第16図－3）は口部のみであるが、灰釉陶器を模したものと考えられる。類品は、小松市加賀八幡の「浄水寺遺跡」で出土している。

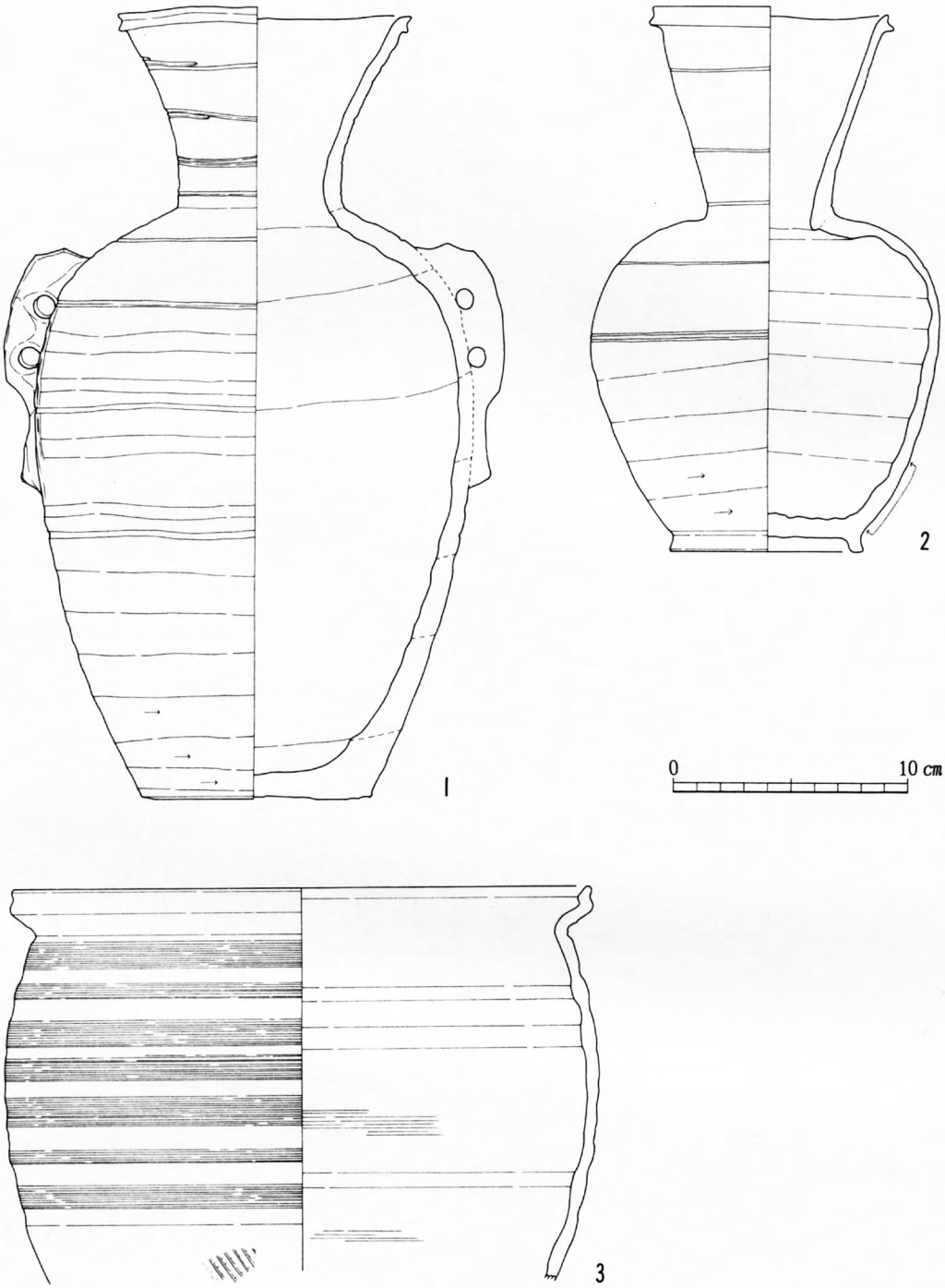
その他、平瓶（第Ⅴ図版4）や陶硯（同図版5）、小壷（第16図－4）なども出土している。



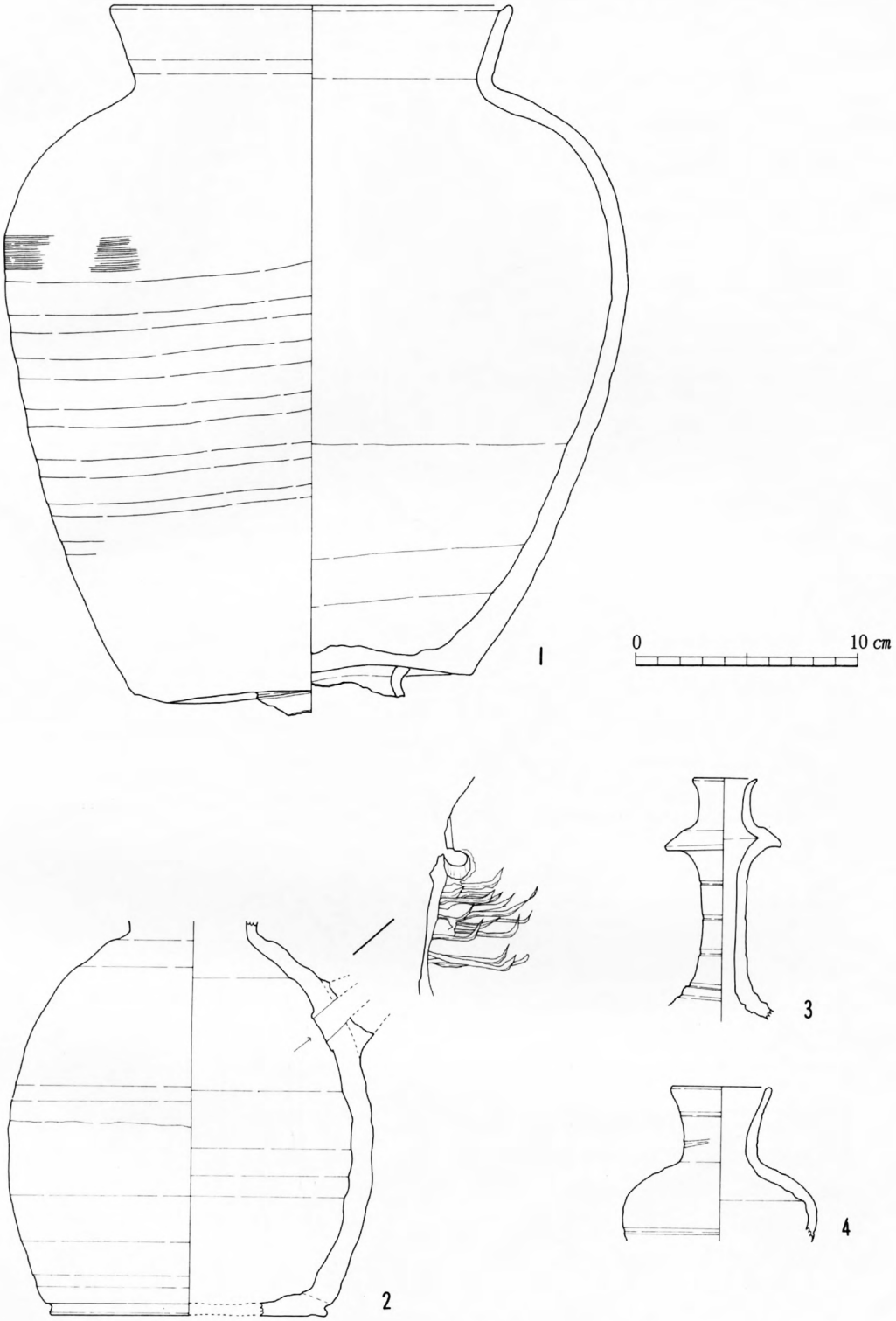
第13図　出土遺物実測図（戸津11号窯跡）S＝1/3



第14図　出土遺物実測図（戸津11号窯跡）S＝1/3



第15図　出土遺物実測図（戸津11号窯跡）S＝1/3



第16図　出土遺物実測図（1－戸津11号窯跡、2～4－A地区灰原）S＝1／3

戸津六字ケ丘２号窯跡出土遺物（第Ⅴ図版６～12）

１次床、２次床でかなりの数の製品が残存していた。特に、１次床焼成部中央には坏、蓋がセットで検出され、良好な一括資料が得られた。１次床と２次床では、改造は部分的であり、時期差はあまりないと考えられる。

遺物は、坏、蓋、高坏、瑞、長頸瓶、短頸壷、壷、甕等がある。

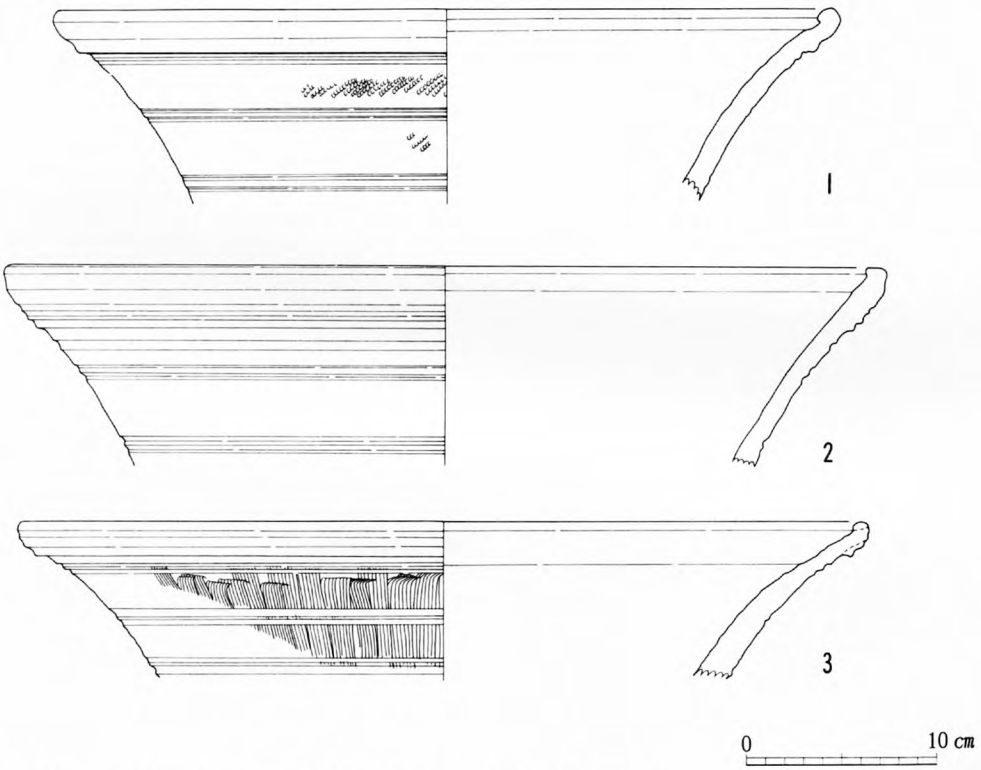
蓋は、天井部に丸みをもつもの（第18図－１、３、５、９）とやや平らになっているもの（同図－７、11、13、14）がある。天井部はいずれもヘラ切りの後ナデ調整を行っている。

坏（第18図－２、４、６、８、10、12、15、16）は、底部がやや平らであり、ヘラ切りの後ナデ調整を行っている。受部は短く上外方にのび、立ちあがりは内傾している。

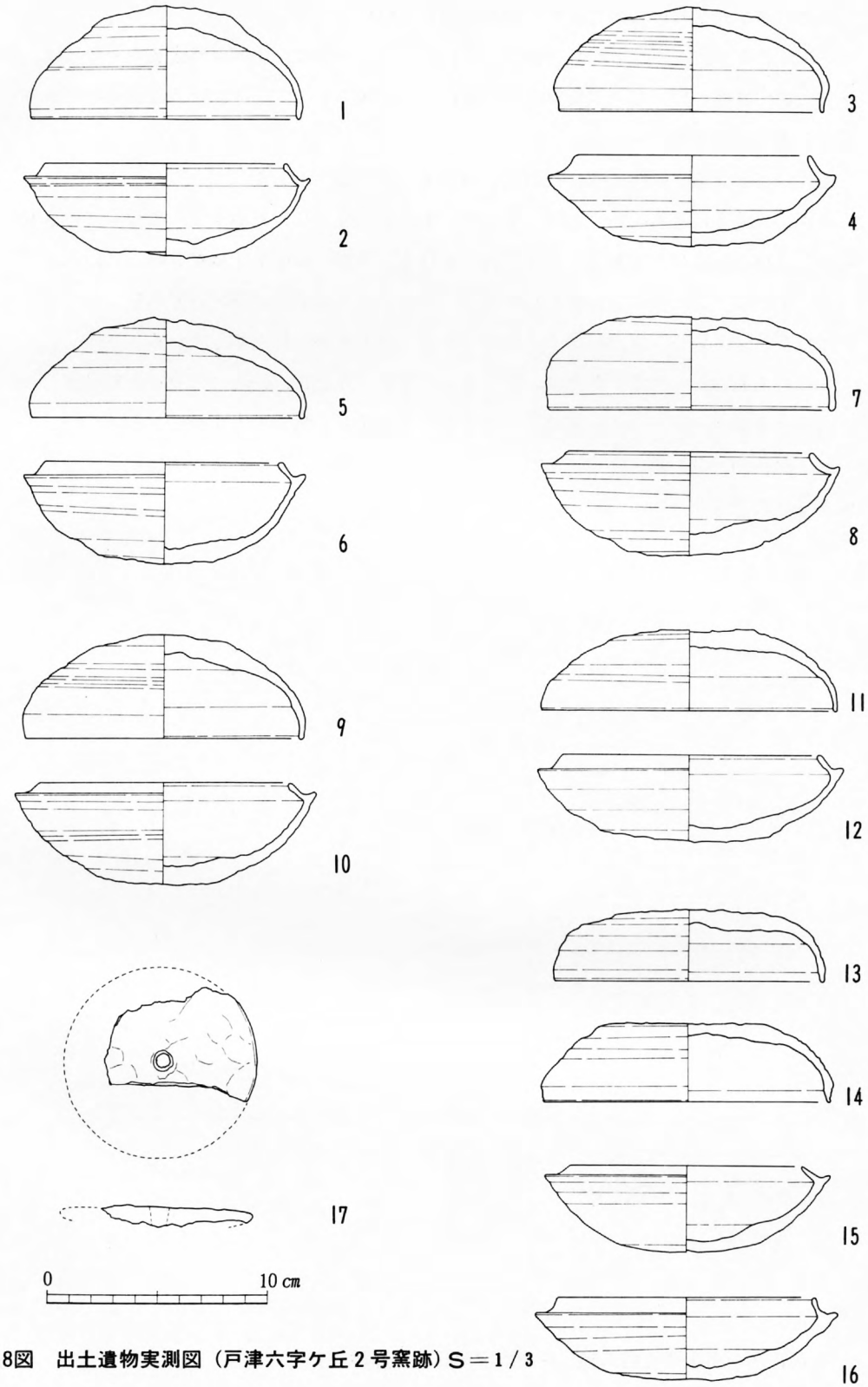
この坏と蓋は、１と２、３と４、５と６、７と８、９と10、11と12のセットで出土した。

高坏（第19図－２）は、坏部に２条の突帯をめぐらし、脚部にはすかしがみられない。

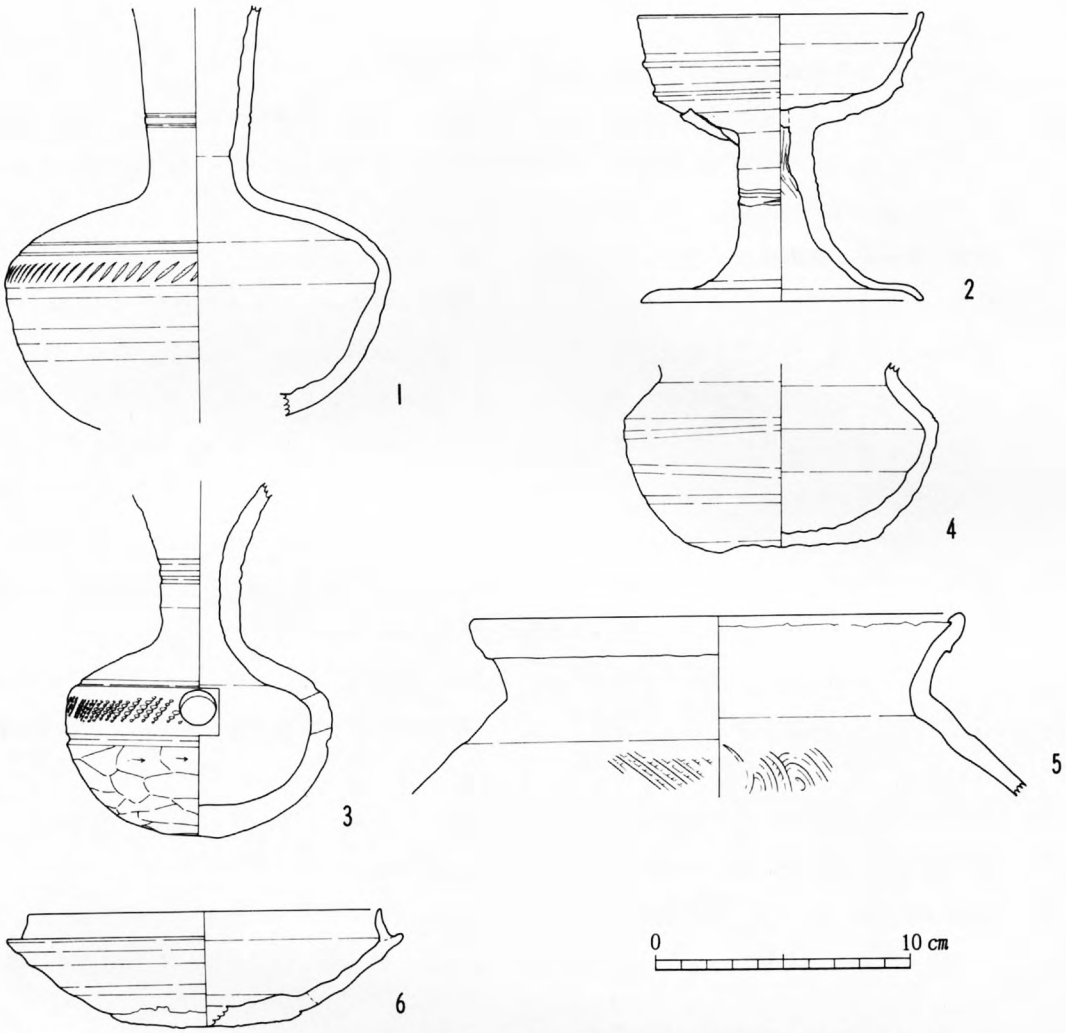
瑞（第19図－３）は、２片に割れて床面と灰原より出土した。胴部に櫛描刺突文をめぐらし、径1.5㎝の円孔をうがっている。



第17図　出土遺物実測図（戸津六字ケ丘２号窯跡）S＝1/4



第18図　出土遺物実測図（戸津六字ケ丘２号窯跡）S＝1／3



第19図　出土遺物実測図（1～5－戸津六字ケ丘2号窯跡、6－同3号窯跡）S＝1/3

長頸瓶（第19図－1）は、口縁部及び底部が欠けている。胴部に櫛描刺突文がめぐらしてあり、その上に2条の沈線が認められる。

短頸壷（第19図－4）は、口縁部を欠くもので、底部はヘラ切りの後ナデ調整を行っている。

壷（第19図－5）は、口径19㎝をはかるもので、外面は平行タタキ、内面は同心円タタキを施している。

甕（第17図－1～3）は、いずれも口縁端部を内側に折り曲げているものである。1点（同図－3）は、燃焼部左の地山直上より出土したものであり、他は床面より出土したもの。

その他、特殊なものとして、紡錘車と考えられるもの（第18図－17）が1点出土している。これは、1次床の埋土よりの出土であり、復元径8.8～9.0㎝で、厚さ0.9㎝である。中心に軸を

入れると考えられる孔がうがたれている。この孔の径は、上端（どちらが上か不明であるが）が0.9㎝、下端が0.65㎝である。

戸津六字ケ丘3号窯跡出土遺物（第19図－6）

床面よりは小片に分かれて小量が出土している。復元が出来、形がわかるものはこの坏1点のみである。底部は、やや平らであり、ヘラ切りの後ナデ調整を行っている。受部は、短く外にのび、立ち上がりはやや内傾し、後、直立している。

戸津六字ケ丘4号窯跡出土遺物（第Ⅵ図版1～8）

窯体内には製品はわずかであったが、前庭部及び灰原よりややまとまって出土している。

器種は、坏、蓋、有台坏、高坏、壷、甕、盤などがみられる。

蓋は、内面にかえりのもつもの（第20図－1～5）ともたないもの（同図－6、7）がみられる。前者は、ソロバン玉状宝珠つまみと扁平でくずれたつまみの2種がある。内面のかえりは、にぶく小さくなっている。天井部は、ナデ調整したもの（3、5）、ヘラケズリ調整したもの（1、4）、ヘラケズリ調整とナデ調整の両者を行っているもの（2）がみられる。後者のかえりのないものは、宝珠つまみを有し、天井部ヘラケズリ痕が残っているものであり、やや平坦な天井部よりなだらかにカーブを描き、下方に強く屈曲した口唇部に至る。

坏は、径16.4㎝、高さ5.0㎝の大型のもの（第20図－12）と、径11～13㎝、高さ3.0～3.5㎝のもの（同図－13～21）がある。いずれも回転ヘラ切りの後ナデ調整を施してあり、底はやや肉厚である。

有台坏（第20図－9）は、底部は回転ヘラ切りの後ナデを施し、低い高台を有している。

盤（第20図－10、11）は、径19～19.5㎝をはかり、高さは5㎝である。

高坏（第22図－2）は、脚部のみである。器高が低く、やや大きな坏部がつく形態である。

その他、甑片と考えられるもの（第21図－2）があり、把手がついている。この把手の左横にヘラによる刻み目が認められる。

甕（第23図－3）は、1片が4号窯灰原の上層出土で、他はB地区灰原より出土したものである。口縁端部を内側に折り曲げ、肉厚の形態を有し、頸部中央に2条、口縁部近くに4条の沈線がみられる。

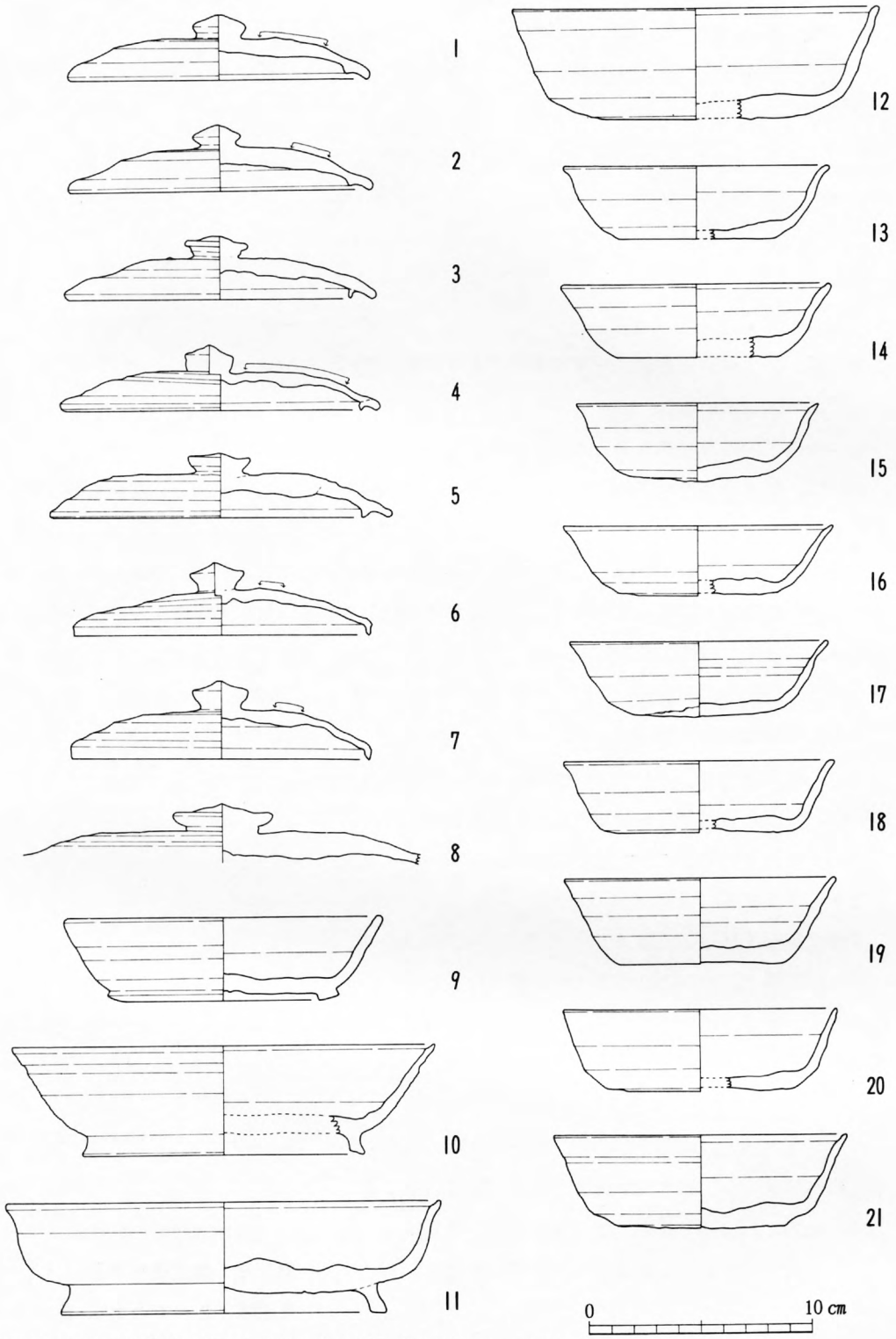
また、横瓶（第Ⅵ図版8）が出土している。写真では口縁だけであるが、整理の過程で胴部も認められた。

B地区灰原出土遺物（第Ⅵ図版7、9、10）

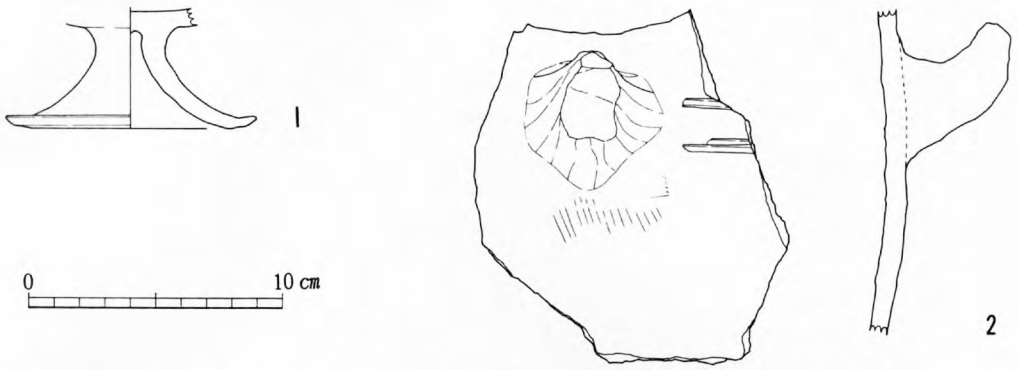
蓋は、天井部が丸みをもつもの（第24図－1）で、これは2号窯跡出土のものと同じ作りである。他は扁平なつまみをもち、なだらかに下ってくるタイプで、内面のかえりは大きいもの（同図－2～4）。天井部にカキ目が認められるものもある。

また、一点、乳頭状つまみをもったもので、扁平になっているものがある（同図－5）。

坏（第24図－6）は、底部回転ヘラケズリ調整を施してあり、口縁端部は内側に折れ曲ってい



第20図　出土遺物実測図（戸津六字ケ丘４号窯跡）Ｓ＝1/3



第21図　出土遺物実測図（戸津六字ケ丘４号窯跡灰原）S＝1/3

て、受部を作っている。

この坏は、かえりのある蓋とセットをなすものと思われる。

高坏は、脚部のみであるが、二段すかしのもの（第24図－９）と、すかしのないもの（同図－８）がある。

甕（第23図－４）は、やはり口縁端部を内側に折れ曲げられるタイプで、内側に同心円タタキを有する。頸部にたてにハケ状具による沈線が施され、その後、横に４条の沈線が認められる。これは、２号窯左の地山直上出土の甕（第17図－３）と同じタイプである。

その他、長頸瓶（第24図－７）、小型の坏（同図－10）、壷（同図－11）が出土している。

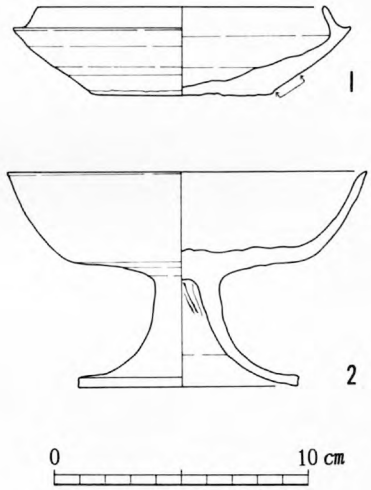
１号土坑出土高坏（第22図－２）

ほぼ完形で出土した。坏部の口径14.2㎝で、器高は8.6㎝。内、外面ともナデ調整がていねいに施されている。器形としては、４号窯跡灰原出土の高坏（第22図－２）と同じでタイプである。

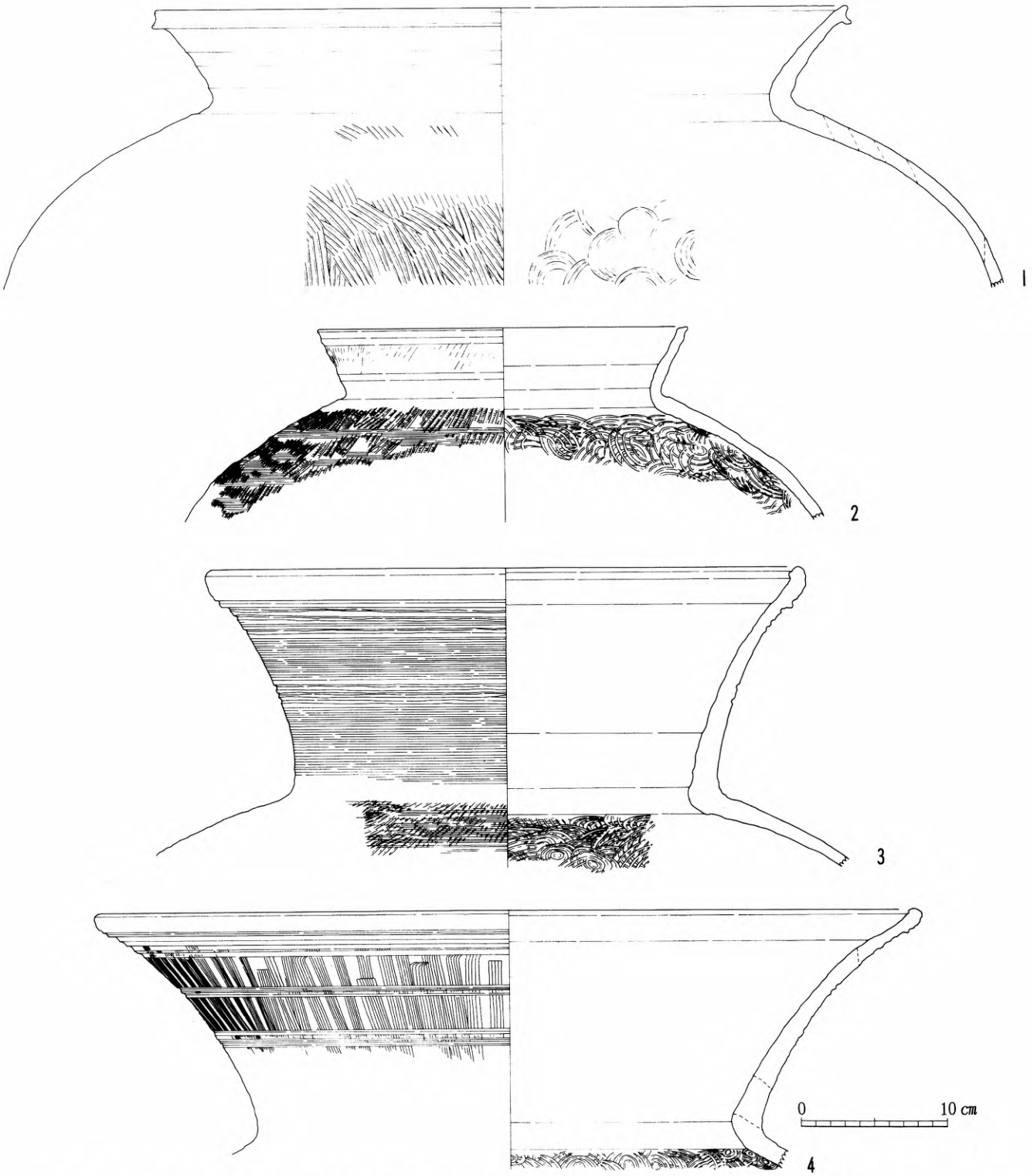
２号土坑出土坏（第22図－１）

平らな底部で、ヘラ切りの後ナデ調整を行っている。受部は短く、上外方にのびている。立ち上がりは内傾している。

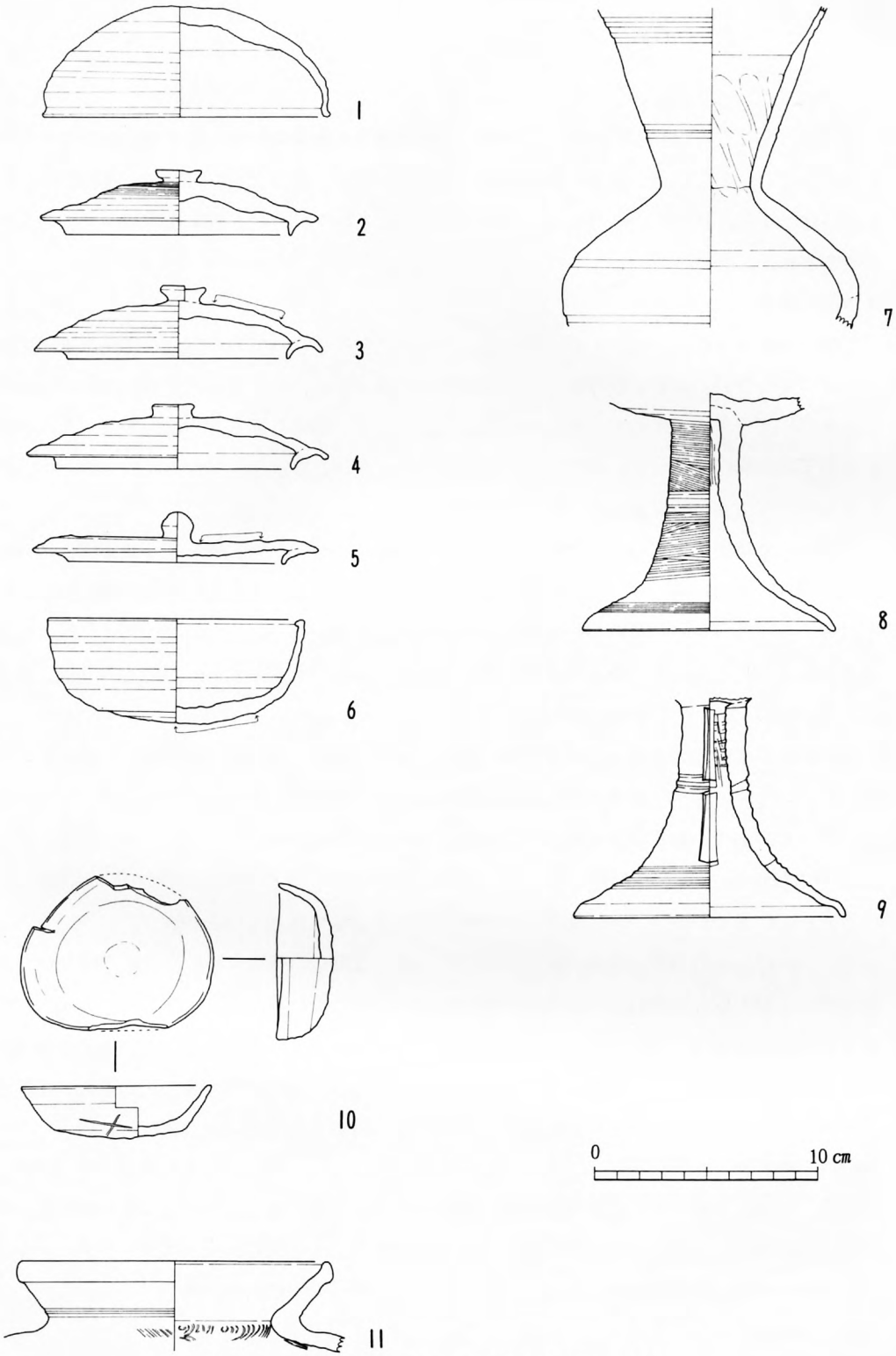
以上、窯内出土の遺物を中心に、若干の灰原の遺物を加えて述べてきたが、出土量が多量であり、整理途中であるので、全てにわたって観察、検討を加えたわけではないので、不十分な点が多いことをおことわりしておく。



第22図　出土遺物実測図（１－２号土坑　２－１号土坑）S＝1/3



第23図　出土遺物実測図（1－戸津11号窯跡、2・3－戸津六字ケ丘4号窯跡床・灰原、4－B地区灰原）S＝1/4



第24図　出土遺物実測図（B地区灰原）S＝1/3

Ⅵ　ま　と　め

今回の調査で、戸津六字ケ丘地区における、農業構造改善事業にかかる開発行為に伴う発掘調査を終了した。その結果、確認した窯跡は、昭和25・50・57年の調査も合わせてＡ地区の戸津町ヨ36番地で４基、Ｂ地区の林町ウ18・20・21番地でも４基を数えた。以下に今回の調査結果を述べてまとめとしたい。

Ａ地区の調査

Ａ地区で検出された戸津10・11号窯跡は、上半部分が削平されていたため、全長は不明であるが、残存長及び幅、傾斜より考えると、10号窯跡は８～９ｍ、11号窯跡は９ｍ前後で、９号窯跡とほぼ同じような大きさの窯であったと推定され、また、傾斜も同じように急であった。いずれも半地下式の窯跡であった。戸津10・11号窯跡は、１次床、２次床と分かれていたが、出土遺物でみる限りはあまり時期差はないと思われる。

戸津10号窯跡出土土器の器種は坏、蓋、有台坏、皿、有台皿、埦、壷、甕、双耳瓶、鉢等である。これらの器種のうち、坏が主流を占め、皿もある程度まとまっていて、埦類は僅少である。坏には、身の浅いものの他に深いものも若干存在している。蓋は無鈕であり、有台坏は身の深いタイプのものである。有台皿は高台の造りが高くしっかりしたもの（１～1.5㎝)の他に、やや高台が低いもの（0.6～1.0㎝）もみられる。

11号窯跡出土土器の器種は、10号窯跡の器種の他に有台碗、有台盤、長頸瓶、浄瓶などがみられるが、やはり、坏が主流を占め、埦類は僅少である。皿も数は多い。坏は身の浅いものが多いが、深いものも少なからず存在する。蓋は無鈕であり、口径19㎝内外の大ぶりのものと、13～15㎝の小ぶりのものの２種が認められる。有台坏は身の深いタイプのものであり、有台皿も高台の造りが高いものが多い。埦は体部下半をヘラケズリ調整を施している。

以上、戸津10・11号窯跡についてまとめてみたが、これらの時期について考えてみたい。両窯跡の出土土器の器種構成は、戸津９号窯跡のそれに近似しているが、その成形技法や調整技法等により、10号窯跡は、９号窯跡とほぼ同時期かやや古く、更に11号窯跡は、それよりやや古いと考えられる。年代的には、供膳形態における生産の主体は、須恵器的器種が占めるが、土師器的器種の埦、有台埦、有台皿といわれるものが存在する段階であるので９世紀代には遡らなく、10世紀前半を想定したい。

また、今回の調査では、灰原の調査も行われた。その結果では、11号窯跡の灰層の上に９号窯跡の灰層が存在し、その上に大部分は削平されていたが、４号窯跡の灰層も薄く認められた（註１）。９号窯跡と10号窯跡では、ほぼ重なっていて、どちらが新旧とは断定できなかった。

Ｂ地区の調査

Ｂ地区で検出された戸津六字ケ丘２号窯跡は、全長12.8ｍ、最大幅1.8ｍをはかる大型で、細長

い構造であった。同3号窯跡は、一部平削されていたが、推定で全長5.0 m程度の小型の窯であった。この2・3号窯跡は、一部地上に出ていた半地下式窯跡であると考える。両窯の特徴として煙道部に溝が付いていることである。焼成部奥の幅より大きめで、床を水平かやや掘りくぼめて煙道部をつくり、片側に溝をうがっている。県内では、小松市那谷町金比羅山1・4号窯跡、加賀市分校3・4号窯跡でもみられ、富山県でも存在している（註2）。 その性格は、排水溝とする説が多いが、那谷金比羅山では、溝の勾配がないものがあり、連結部が強く酸化している点より、「燃焼効率及び温度上昇を図るために必要に応じて付加した送風施設」（註3）とみなしている。本窯でも、煙道から溝の一部にかけて酸化して赤く焼けていたので、還元焼成時には使用しなかったものと考え、その説が現時点では合理的と考えたい。尚、福岡県の野間第3号窯跡においては、排水溝の出口に炭を充塡した土坑があり、報告者は関連があるかどうかは不明としている。（註4）が、あるいは、この用途を考える上で参考となるかもしれない。

戸津六字ケ丘4号窯跡は、全長7.9 m、最大幅1.8 mをはかり、煙道も直立よりやや前傾して1 m程度残っていた地下式の窯跡であった。窯底には、段が認められ、舟底ピットも検出した。

同2号窯跡出土土器は、蓋の天井部をヘラ切り後ナデ調整を行っていて、坏の底部も同じである。また、本窯の灰原より、蓋で天井部にカキ目をもち、扁平なつまみで、内面のかえりが大きいものが認められ、これとセットをなすと思われる坏の底部は回転ヘラケズリを行っている。これらは、那谷金比羅山6号窯跡の出土土器に近似しているが（註5）、これよりやや後出する様相と思われ、7世紀の第1四半期頃を想定している。

同4号窯跡出土土器は、蓋に内面のかえりのあるものとないものがある。前者は、かえりがにぶく小さくなっていて、つまみは、宝珠形がくずれた感じのものであり、天井部ヘラケズリとナデ調整の両方が認められる。後者は、天井部ヘラケズリを行い、下方に強く屈曲した口唇部をもち、宝珠鈕をもつものである。坏は、やや肉厚で、回転ヘラ切り後ナデ調整を行っている。また、有台坏が認められる。以上のことより、本窯跡の年代を推定すれば、飛鳥Ⅳ期頃に比定でき（註6）、7世紀の第4四半期頃と想定したい。尚、同3号窯跡は、出土土器がほとんどなく、年代推定は困難であるが、同2号窯跡と同じか、後出するものと考えている。

註1　「戸津9号窯」（1980. 3 小松市教育委員会）において、戸津8(4)号灰原遺物として載せたものの中に、今回調査した11号窯跡のものも含まれていると考えられる。当時の資料の吟味のし方、出土状態の把握に問題があったように思えるので、今回の調査の結果をふまえ、今後の整理していく過程で再検討を加えたい。

註2　小杉流通団地内No. 7遺跡の1・5号窯跡、同No.16遺跡の3号窯跡、射水郡大門町石名山2号窯跡などで検出されている。

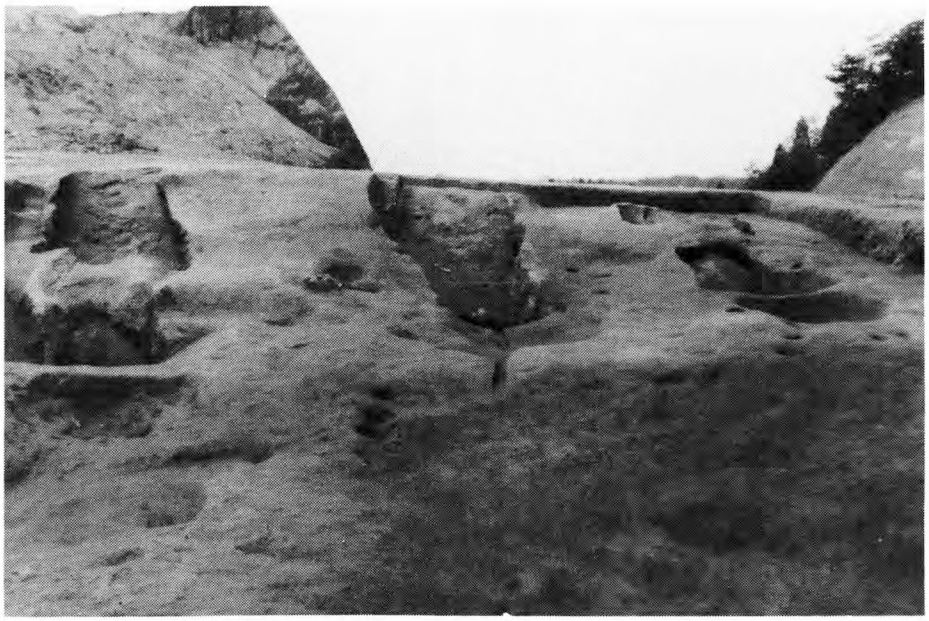
註3　『那谷金比羅山古窯跡群』「昭和59年度県営ほ場整備事業・県営公害防除特別土地改良事業関係埋蔵文化財調査概要」（1985. 3 石川県立埋蔵文化財センター）

註4　「野間窯跡群」（1985. 3 福岡県教育委員会）

註5　福島正実氏の御教示による

註6　西　弘海「土器様式の成立とその背景」（1986. 5 西　弘海遺稿刊行会編）

図版Ⅰ　遺構

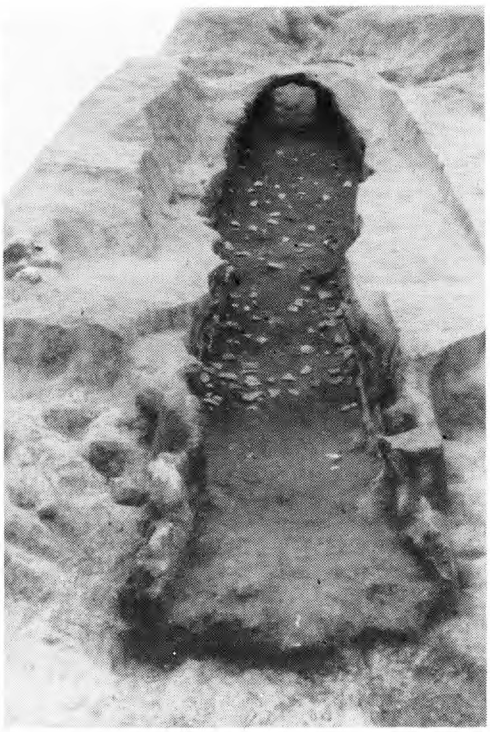


Ａ地区全景　（右より戸津10号・９号・11号窯跡）

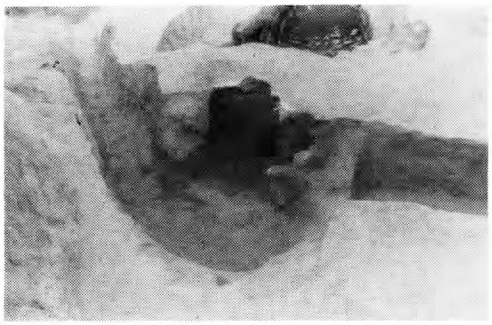
戸津10号窯跡

戸津11号窯跡

図版Ⅱ　遺構



戸津六字ケ丘２号窯跡



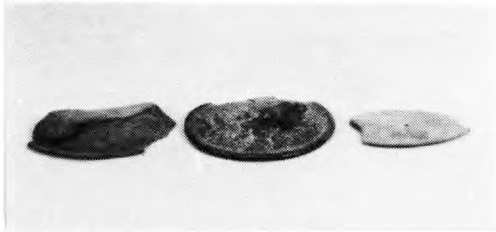
同２号窯跡煙道部

戸津六字ケ丘３号窯跡

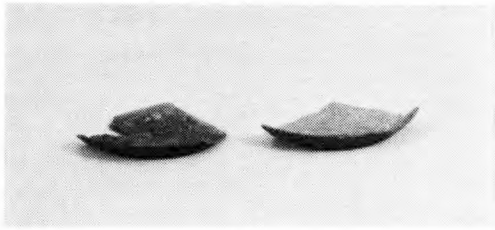
戸津六字ケ丘４号窯跡

同３号窯跡煙道部

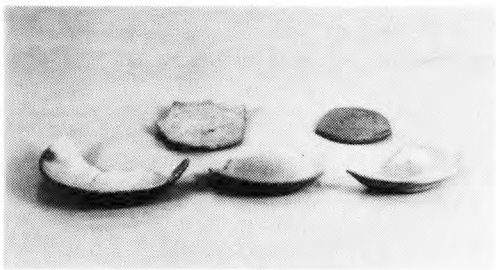
図版Ⅲ　遺物



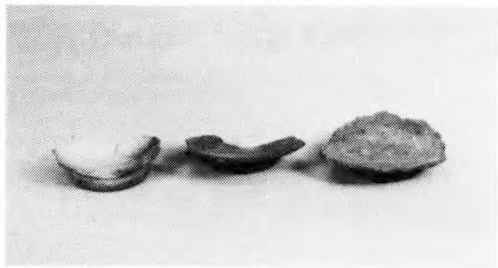
1



2



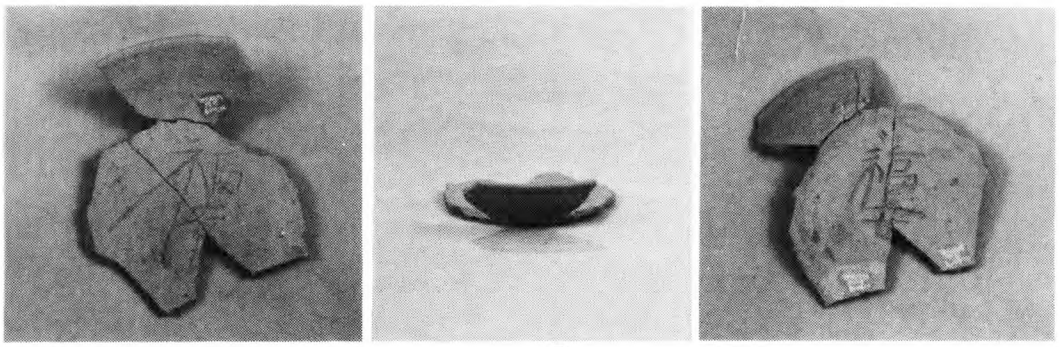
3



4

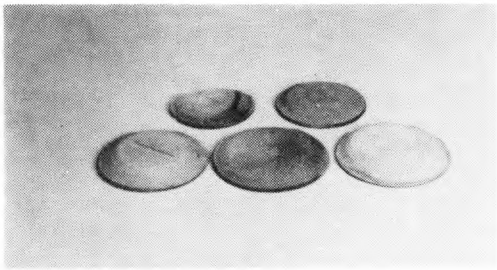
5

6

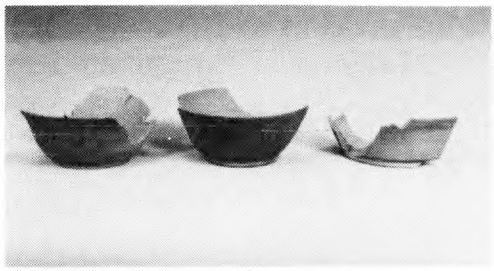


7

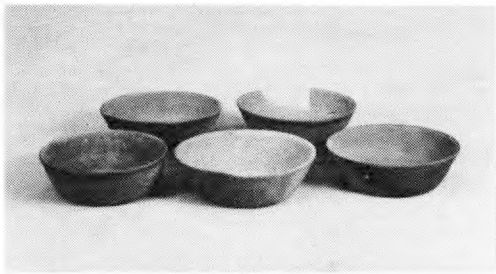
図版Ⅳ　遺物



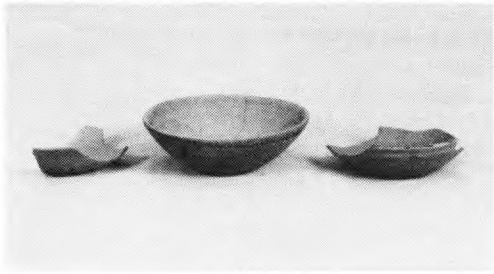
1



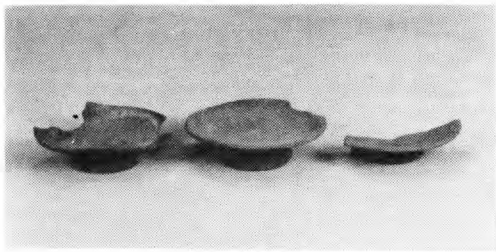
2



3

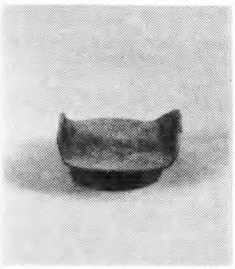


4

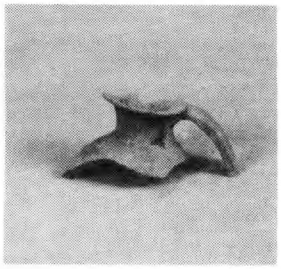


5

6



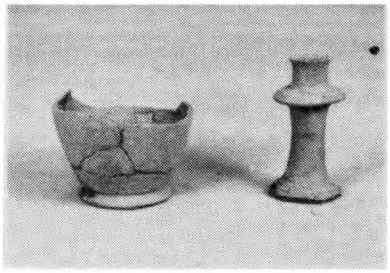
7



8

9

10

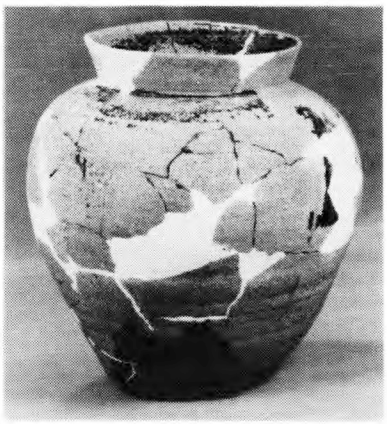


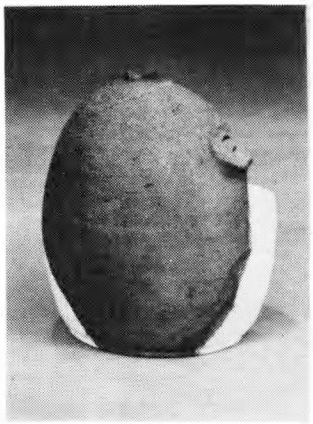
11

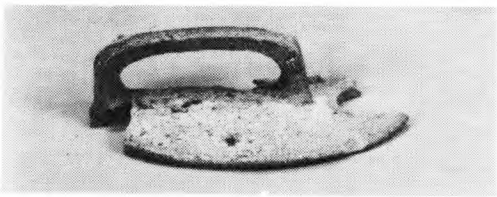
12

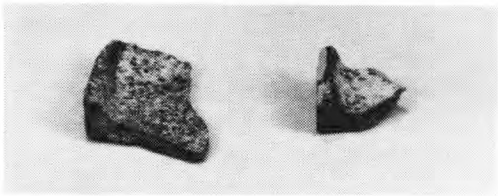
図版V　遺物

1


2


3

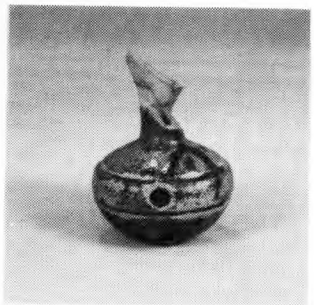

4

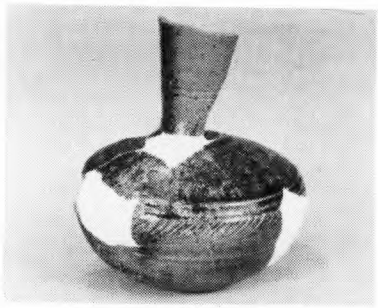

5

6

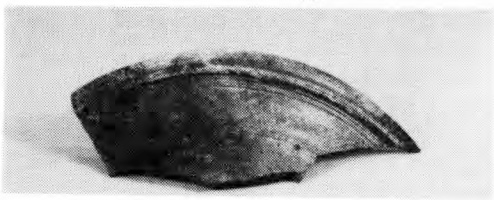
7

8

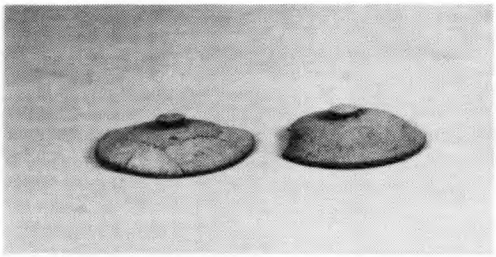

9


10

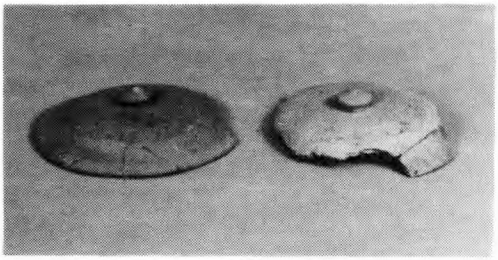
11


12

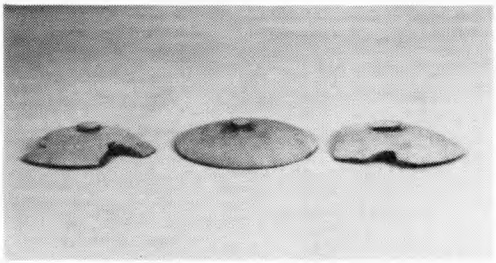
図版VI 遺物



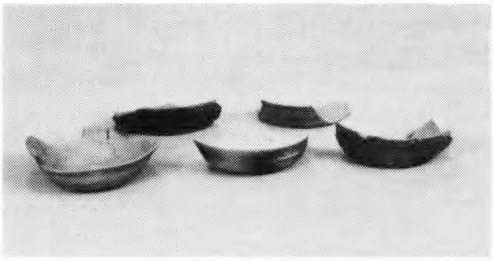
1



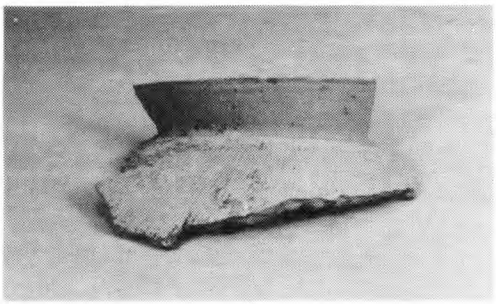
2



3

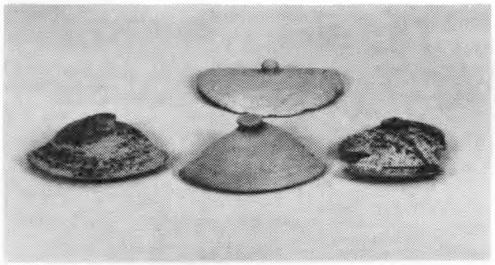


4

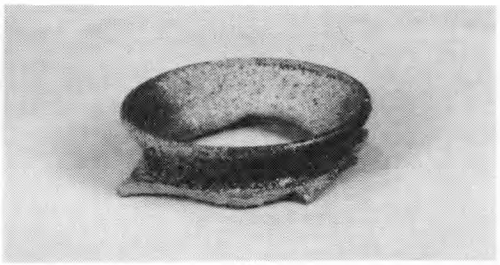


5

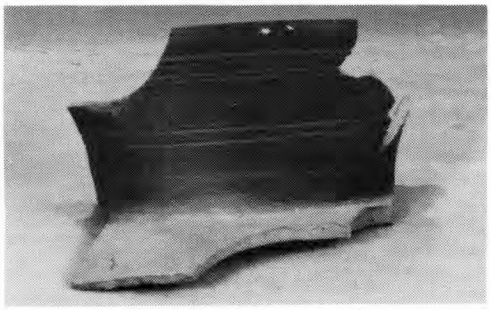
6



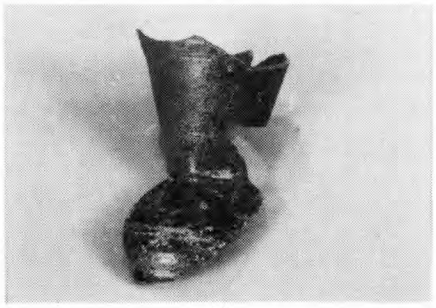
7



8



9



10

戸津六字ケ丘古窯跡群発掘調査報告書

昭和62年3月30日

編集・発行　小松市教育委員会
〒923 石川県小松市小馬出町10番地
0761−22−4111

印　　刷　鵜川印刷株式会社